

大阪産業大学 学会報

60

テーマ アフターコロナの大学の在り方



2024

表紙 令和6年度 写真・イラストコンテスト(写真部門)優秀賞作品
『繋ぐ未来への花』
佐藤 優生(工学部 電子情報通信工学科)



アフターコロナの 大学の在り方

小川 和彦

大阪産業大学学会 会長(本学学長)

ACADEMIC
SOCIETY
OF
OSAKA
SANGYO
UNIVERSITY
2024

このたびの学会報の特集テーマは、『アフターコロナの大学の在り方』です。教育という面から考えると、コロナウィルスが特に世界的に蔓延した2020年～2021年の間、教育がオンライン中心とならざるを得ず、教育の形態が大きく変わった時期と言えます。この2年間に教育のIT化が飛躍的に進んだのは事実であり、オンライン・オンデマンド教育にも光と影の部分があるものの、これからはICTを前提とした教育に移行していくことになります。また、前年度の学会報では「AI時代における大学教育」が特集テーマでしたが、AI技術を取り入れた教育も考えていく必要があります。

大学教育の主な役割は、「専門的知識の修得」と「社会人としての成長」にあると考えます。「専門的知識の修得」に関しては、特に理工系、スポーツ系の実験・実習は難しいとしても、座学での講義はオンラインで置き換えてもほとんど問題はないかもしれません。ただ、2020年～2021年の間で問題として浮かび上がったのは、高学年の学生は友人関係がある程度築かれており、突然オンライン授業に移行した際に友人間で情報交換が行えるので、比較的スムーズにオンライン授業についていくことができ、疎外感を感じることは低学年の学生に比べて比較的少なかったのに対して、最初からオンライン授業であった新入生は友人関係ができないままに1-2年間を過ごすことになり、自分は取り残されてしまった、と感じる学生が多かったということです。このような状況では、「社会人としての成長」をいかにして達成するか、よく考えていく必要があります。

現在、本学の授業は対面授業に復帰しています。アフターコロナでは課題提出、授業内での小テストの実施、教材の提供など、WebClassが頻繁に使われており、授業の録画、あるいは予習・復習用の動画を用意する科目も増えています。このことは学生諸君の予習・復習を促すための非常に有効なものと思いますが、単にツールを使っているに過ぎません。大学の価値は、「新しい価値」を生み出すことにあり、ICT技術を用いて、教育のDXが進み、学生と教員の間で今までにない独創性のあるアイデアを生み出すこと、あるいはテクノロジーを生かして相互に教えあい学びあうような場を作っていくことが必要と考えます。

研究という面では、既にICT技術の応用、DX化が進んでいますが、最近問題が指摘されるのは、研究者が種々のデータを用意すれば、AIが考察まで行ってしまうことが徐々に可能となってきたということです。論文作成の強力なツールとなりますが、研究のオリジナリティは著者なのか、AIなのか明確ではなくなりつつあり、今後検討されるべき課題となっています。

最後に、このたびの特集が皆様の教育・研究に役立つことを、願っております。



CONTENTS [目次]

巻頭言

アフターコロナの大学の在り方

大阪産業大学学会 会長(本学学長) 小川 和彦

令和7年度学会行事予定一覧

4

06

特集 アフターコロナの大学の在り方

アフターコロナの大学の在り方 ～コロナ禍とアフターコロナを振り返る～	(経営学部 経営学科)	北田 流空	6
アフターコロナの大学のあり方 ーピンチはチャンスだー	(経済学部 経済学科)	戸谷 裕之	8
アフターコロナの学生へのメッセージ	(スポーツ健康学部 スポーツ健康学科)	佐藤 誠	9
アフター・コロナの学生活動: 一度切れてしまったつながりを求めて	(デザイン工学部 環境理工学科)	原田 光晴・岩本 幸知	10

14

学会主催見学会

「関西国際空港見学会」感想	池上 悠熙	14
愛知交通産業見学会 感想文	西村 慶太	16
日本の歴史や天体に触れて	三枝 加奈	18
美術館建築における一体感と視覚体験	切建 尚也	20
自然と調和し発展する港町の魅力を体験	Nguyen Quoc Hieu	22

26

コンテスト報告

令和6年度 企画委員長

笹岡 敬 26

コンテスト優秀賞作品

第25回「ぶんかくコンテスト」(長編部門)優秀賞作品:

日高書店経営日誌

(経営学部 経営学科)

西川宗一郎 30

44

講演会報告

認識の余剰

(工学研究科環境デザイン専攻 博士前期課程)

杉原 康太 44



48

留学記

カナダ留学レポート	
多くを得た韓国留学	
アメリカ6ヶ月留学を終えて	
自分の現在地	
米国留学を終えて	
充実した留学生活	
私の韓国生活	
韓国での1年間	
オーストラリア留学を通して学んだこと	
オーストラリア留学体験記	
約1ヶ月のオーストラリア生活にて	
オーストラリアでの五週間	
私のオーストラリア留学	
結果良ければすべて良し	
朝鮮語海外研修での経験	
中国語海外研修レポート	
学びと経験の3週間	
シアトル留学レポート	
ニューカッスル ノーザンブリア大学 在外研究記(2023年9月~2024年10月)	

和泉 陽	48
西岡 楓果	50
川村 葵	52
柴田 慶汰	54
三原 新元	56
山口 夕葵	58
佐々木初和	59
山中 香織	61
竹國倫太郎	63
重田 力輝	66
稲葉 淳一	68
竹内 祐人	70
島本 千怜	72
小林 千鶴	74
安達こころ	76
NGUYEN HUONG THOM	78
木下 陽貴	80
柴田 嵩大	82
澤登 千恵	84

88

学術研究書出版助成本の概要

『漢語意合語法説略』の概要	張 黎	88
---------------	-----	----

92

学会報告

令和6年度 年次報告	令和6年度 常任委員長	塩見 剛一	92
令和6年度 学会活動報告			93
令和5年度 学会会計報告	令和5年度 財務委員長	塩見 剛一	96

編集後記

	令和6年度 編集委員長	朴 容寛
--	-------------	------

令和7年度学会行事予定一覧

EVENT INFORMATION

4月	学会報デジタル化	学会webサイトにて閲覧
7月	前期見学会参加受付	各学部掲示板、学内各所、学会webサイト、Portal-OSUで案内
夏期休業期間中	各種見学会開催予定	
9月	後期見学会参加受付 学会コンテスト募集開始	各学部掲示板、学内各所、学会webサイト、Portal-OSUで案内
10月	学会コンテスト募集締切・書類審査 ※優秀な作品は学会報に掲載されることがあります 学術講演会	
11月	学会コンテスト最終審査 各種見学会開催予定	
※適時	後援事業	

※見学会、講演会等の学会企画事業については、適時、学会webサイトでもご案内します。

※コンテストの応募内容や詳しい情報は、学会webサイトや学内掲示のポスター等でご確認ください。

※各見学会は、募集人数に制限があります。詳しい内容につきましては学会webサイトやポスター等でご確認ください。

学会公式webサイト <https://as-osu.jp/>



大阪産業大学学会とは

「大阪産業大学学会」は、昭和39年(1964年)に設立された学術研究団体です。

本会は本学における学術・研究・教育の発展および普及に寄与し、あわせて学会会員の研究助成等を図ることを目的としています。これらの目的を遂行するため、「大阪産業大学論集」「大阪産業大学学会報」の発行、「学術講演会」等の講演会・研究会・シンポジウム・学外研修会の開催、教員会員だけでなく学生会員の研究教育活動の助成、海外留学の助成等の事業、さらには、主に学生会員を対象とする各種コンテストや様々の学外見学会を行っています。

〈学会に関するお問い合わせ先〉

大阪産業大学学会事務局(本館8階 産業研究所事務室内) 072-875-3001(内線:2815) お気軽にご連絡ください

特集

アフターコロナの大学の在り方

特集

Special Topics



令和6年度 写真・イラストコンテスト(イラストデザイン部門)優秀賞作品
「画虎点睛」
河村 隼吾(工学部 交通機械工学科)

アフターコロナの大学の在り方 ～コロナ禍とアフターコロナを振り返る～

経営学部 経営学科 北田 流空

新型コロナウイルス、かの病魔が振るった猛威については今更語るまでも無く皆が知る所だろう。我々はコロナの影響であまりに多くのものを失った。穏やかな日常や人のつながり、有名芸能人や世界の著名人、身近な親族に関しては満足に見送る事も出来ないまま喪ってしまったという人も多かっただろう。しかしかつては先の見通せぬトンネルとも言われたコロナ最盛期は終わりを迎え、今現在アフターコロナと呼ばれる光の時代が到来した。街を見れば人が行き交い、大学内を見ればマスクを着けずに談笑する若い学生達の姿が数多く見受けられる。一見世界は元の日常を取り戻したかのように見えるが、しかしそれは誤りだ。我々はコロナ以前とは一変した日常を生きている。その最たるものが大学のインターネットサービスの拡充だ。例えば真面目に授業に出席している学生が毎日行っているであろう出席打刻、授業レジュメやレポートを提出するWeb Class、コロナ禍で行われていた非対面のリモート授業などがそれにあたるだろう。我々学生が日常的に使用しているこれらインターネットサービスの拡充は、世界に多大な悪影響を与えたコロナの数少ない好影響と言えるかもしれない。

だがコロナ禍当時は、そんな好影響などという単語が間違っても脳裏をよぎらない程に状況は悪かった。端的に表せば最悪と言っても良いだろう。突如国外からやって来たコロナウイルスは対策の暇無く国内を蹂躪し、やがて世界中を巻き込む未曾有のパンデミックを引き起こした。会社は休業を迫られ、小中高、大学に至るまでが数か月間に渡り閉校を余儀なくされた。我々は社会との繋がりを失ったのだ。だが先述の通り失ったものだけでは無い、新たに得た、生まれたものもある。クラスター、濃厚接触者、PCR検査、ソーシャルディスタンス。これらの単語は今でこそ聞く機会が少なくなったが、当時はニュースや新聞などで毎日のように見聞きした言葉達、コロナ禍に伴い生まれたものである。また直接接触を禁じられ物理的距離が遠くなった半面、必要に駆られる形で発展したZoomやGoogle Meetによって世界の情報的距離は一気に縮まる事となった。私はリモート形式が定着してから入学

した為リモートへの拒否反応は無かったが、実装された2020年当時の学生達や先生方は相当苦労した事だろうと思う。授業はリモート・オンデマンドという未知の形になり、授業を行う先生方は戸惑い、聞く生徒達は苦労しただろう。人一人居ない教室で話す授業はどこか空しく、自宅で受ける授業はどこか物足りない。リモート授業ならではの利点というものも確かにあるのだろうが、やはり今のこの形が良いと現状を噛み締めるばかりだ。

ところでこうしてコロナに関して筆を執っている七月現在、多くの三年生、四年生にとっては就活について考えなければならない時期である。右も左も分からない中、キャリアセンターを活用しながら企業の説明に聞き入り、夏季休暇から行われるインターンシップには期待と不安を抱えている事だろう。エントリーシートによくある「学生時代に力を入れたこと」の項目に書く事が無いというニュースを当時目にしていた私は、今になってコロナ禍の就活の困難さを想像してみると、当時の学生達がどれほど厳しい状況に直面していたかが良く分かる。採用活動の停止や縮小が行われる中、学生達は限られた機会を如何にして掴むか苦悩した事だろう。インターンも面接も対面で行う事が困難になり、その結果両者のオンライン化が行われた。リモートでの面接やインターンシップは、対面での交流とは違った準備やスキルが求められた。画面越しのやり取りでは自分の個性や意欲を伝える難しさがある一方で、地理的な制約がなくなり、全国どこからでも参加できるという新たなメリットも生まれた。こうした状況の中で、学生たちは自らを磨き、新しい環境に適応していく力を身につけてきた。そんな先人達が築き上げてきたノウハウを生かしてアフターコロナの新時代を生きるのが今の私達である。

アフターコロナの時代において、私たちは以前の生活をほぼ取り戻したと言えるが、完全に元の状態に戻る訳ではない。コロナ禍で学んだ事や、適応した新しい形はこれからの大学生活や社会生活においても活かされていく。今後リモート技術はさらに進歩していき、世界は縮小していくだろう。そしてそんな小さくなった世界において、大学

はただコロナ以前の形に戻るだけでなく、更に今後の社会に適応し進化していく事が求められている。先人達が手探りで歩んだ道のりから学び、教訓を生かし、学生達に変化する社会で活躍出来るような土台を築ける環境を整える事が、今後の大学の使命と言えるのではないだろうか。

アフターコロナの大学のあり方 —ピンチはチャンスだ—

経済学部 経済学科 教授 戸谷 裕之

2020年1月に発生したコロナ禍は、世界中の人々に甚大な影響を与えました。われわれ大学の運営もその例外ではありませんでした。とりわけオンラインを使った遠隔授業への対応が求められたことはその筆頭です。

今までに経験のない授業形態とあって、繋がらない、音声が聞こえないなどといったトラブルが頻発しました。そもそもデジタル音痴の私などにとっては、よく分からないことだらけの中での授業配信でした。どちらに問題があるのかは分かりませんが、無記名で「ちゃんとやれ」などという書き込みがタイムラインに上がってきた時など、冷静に対応するにはこちらにも相当の忍耐が必要であったことを思い出します。

しかしこういうことを乗り越えた今となっては、コロナによってIT化が進んだことは、むしろ良かったのではないかと考えています。例えば、資料の配信が容易になりました。大講義になると300枚以上にもなる資料を、以前はすべて印刷して授業中に配布していましたが、今は事前にWebClassに上げておくだけです。あるいは、レポートや卒論の提出もメールでやりとりするだけで良くなってきています(もっとも、昔人間の私はそれらをプリントアウトして読まないで頭に入りませんが……)。また授業の感想を毎回WebClassのメッセージに送信させていますが、これを読むのは教員としてもなかなか楽しいものです。「この学生よく分かってるな」とか「あそこもう少し説明すべきだったかな」などなど。

コロナで友達が出来なかった、学生生活の楽しみや質が落ちたということもよく取り上げられた問題ですが、当の学生に問えば、そのときはそうだったけれど対面授業が始まればまた普通に友達が出来てきた、という返答がほとんどです。対応力に富んだ若者にとっては、それほどのダメージは受けなかったのかもしれない。

コロナを乗り越えた事によって、少なくともIT化は劇的に進んだように思います。われわれ教職員の会議も一部がWebになったことによって様々な意味で便利になりました。コロナという災難がなければ、授業も会議も対面以外は考えられなかったでしょう。ところが否応なしにデジ

タルを取り入れなければならなくなったことによって、デジタルと生のハイブリッドが可能になっています。

しかし、いくら便利になったとはいえ、デジタルだけではこころもとない。対面での生の授業もやはり必要だと思います。「生演奏が感動を与えるのは、そこにいる人たちが同じ空気の振動を共有するからだ」というのは、国際的指揮者の佐渡裕^{さど ゆたか}の言葉です。同じ教室で、友人と同じ空気間の中で過ごすというのも、学生生活にとっては必要不可欠なことでしょう。デジタルと対面、この両方のメリットを上手く活かせることが出来れば、より良い大学の未来が見えてくるのではないかと私は今思っています。

アフターコロナの学生へのメッセージ

スポーツ健康学部 スポーツ健康学科 佐藤 誠

2020年より世界中を猛威に振るった新型コロナウイルスですが、少しずつ終息へ向かい、2023年5月22日より「ウィズコロナ」から「アフターコロナ」へと移り、徐々に以前の日常を取り戻しつつあります。新型コロナウイルスによって大学生生活に様々な影響がありましたが、実際に、大学生生活4年間をコロナ禍で過ごしてきた私の体験や経験を踏まえて、その時感じていたことや「アフターコロナ」に移り変わったいま思うことについて考えてみました。

コロナ禍の大学生生活で感じたこと

大学生生活では、1年生から3年生頃まで入校の制限があったため、大学での友達が部活動以外ではなかなかできませんでした。普通であれば、入学式や対面授業を通して、コミュニケーションをとっていたはずですが、新型コロナウイルスの影響により様々な行事や対面授業がなくなってしまったため、直接的な交流が少ないまま3年間を過ごしました。4年生になると、授業もほとんどないので、大学での友達は数えるほどしかできなかったというのが残念でした。そのため、授業や試験、就活などの情報交換ができなかったのも併せて不便だと感じていました。初めての就活がコロナ禍と重なったため、何もわからない状態の中で、ネット検索をかけ、なんとなく就活をしていました。就活は情報が多ければ多いほど良いと考えていたので、周りからほとんど情報が入ってこないというのは大変不安でした。些細なことでも頻繁に情報交換できたらずいぶん違ったと思います。

このようにマイナス面が多かった大学生生活ですが、社会人となつたいま思うと、とてもプラスになっていると実感することも多くあります。まずは、ICT機器に強くなれたことが1つです。コロナ禍では、大学に入校することが禁止され、ほとんどの授業がZoomやMicrosoft Teamsなどを使ったオンライン授業で展開されました。また、課題もWordやExcel、PowerPointを使って個人でまとめ、提出するといった措置が取られました。現在、社会人となりこの経験が活きていると実感しています。コロナの影響がなければ、ICT機器に関する知識はほとんどないまま社

会人を迎えることになっていましたが、オンライン授業を経験したおかげで、ある程度の知識を自分のものにして仕事を進めることができています。

新型コロナウイルスが終息しつつある中でも、私が通っていた大学では、週ごとにオンライン授業と対面授業を交互に行うハイブリット型授業での対応がありました。これも、プラスに考えられるところだと思います。オンライン授業であると、自分が好きな時間帯やタイミングで受講することが可能であったため、学生生活にとって貴重な時間を有効活用することができました。

「アフターコロナ」となった今

新型コロナウイルスによる制限がなくなってきた現在は、対面授業も当たり前になり、実習やオープンキャンパスなどの行事、部活動やサークルなども以前のように行えるようになりました。人と対面してコミュニケーションが取れるようになったことを活かして様々なことに参加し、体験してほしいと感じます。大学や地域でのイベント、部活やサークルの大会や打ち上げなどが出来なかった私が感じるに、そこでのコミュニケーションや経験というのは、大学生生活が終わってからも一生忘れることのないものです。卒業した後に必ず生きる自分の力になります。ぜひ、参加して今後の経験値としてほしいなと思います。

たくさんの経験、体験ができるようになった「アフターコロナ」を楽しんで過ごしていくことが1番だと感じます。4年間しかない大学生生活をより良いものにしてもらえるように、学生に想いが届けばいいなと思います。

アフター・コロナの学生活動： 一度切れてしまったつながりを求めて

デザイン工学部 環境理工学科 原田 光晴・岩本 幸知

• お二人は大学の授業とは別に、大学で学生主体のプロジェクトに参加されていますね。

原田：「エコ推進OSUパワープロジェクト」です。

• 学生主体のプロジェクトには、ほかにどのようなものがありますか？

原田：ものづくりプロジェクト。森川田んぼプロジェクトなどですね。

• 今日のテーマは、学生の皆さんの、例えばクラブ活動、サークル活動何かが2020年からのコロナ騒動で2020-2021年まで大学にも来れないし、学生同士の活動もできない、ということがあって、それをどうやって復活させていったか、という話です。

授業の方は教員主体でやっていきますが、学生同士だと、学年が違う、縦のつながりが一旦切れてしまうと大変だと思うのですが。

岩本：2020年、2021年はリモート授業で、電車通学はダメ、大学にも来てはいけない、という状態でした。2022年は一般教養はハイブリッド、環境理工学科の授業は対面でした。

• ちなみにプロジェクトでは、どんな活動をしているのですか？

原田：環境教育です。小学校に行って、授業をさせてもらっている。

原田：市役所の人とあって、テーマを決めます。市役所は環境課の方が担当。どんな内容を小学生にしたらいかななどをアドバイスしてもらったりしている。依頼が小学校から市役所に来て、それを受けて私達は学校に向くこととなります。

授業内容は、省エネや近年の地球温暖化の話。写

真を見せて。ホッキョクグマが孤立している写真など。あとは、温暖化のせいで、降水量が増加して、家が水に浸っている写真など。自分たちができることを小学生に考えてもらうことなど。小学生からは、節電する、こまめに、といった意見が出ます。石油をやめる、とか、緑を増やすとかです。

小学生に「授業面白かった」といってもらえるのが嬉しいです。

授業の最後に二枚の写真。環境にいい家、悪い家。水が出しっぱなし、パネルがない。エアコンがつけっぱなし。電気つけっぱなし。

まずどっちがいいか悪いかを選んでもらって、なぜだめか。理由を上げてもらった。

• なるほど。

原田：コロナ前までは20人くらいエコ推進のメンバーがいた。でもコロナで活動できなくなって、人数も減ってしまいました。

• 復活のきっかけは？

原田：2023年まで、花田先生は大学院何かでの授業で来られていました(注：現在は定年で退職されています)。で、必修ではないんですけど、環境政策論という授業を聞いていたんです。そのときに、先生がエコ推進プロジェクトの話をしてくださって。興味を持って、話を伺うことになりました。それがきっかけです。



で、自分(原田)が2年生の時、2023年の9月なんですけど、小学校へ行きました。四條畷学園小学校。9月だと、小学校は夏休みが終わって授業が始まりますが、大学生はまだ後期授業が始まる前で、時間が取れるので、そのタイミングでした。

- なるほど、すると今年はまだ(注：取材時、2024年6月下旬)なんだね？

原田：そうです。

- 岩本くんが関わったきっかけは？

岩本：もともと友人だった原田に誘われたんです。というか、助けてくれ、みたいな感じで。環境や、教育にも興味があったので、参加することにしたんです。

- 環境理工学科という枠組みが学生が集まりやすいという側面が有るようですね。それでも授業の中で、そうしたプロジェクトの話をしていくってということは、教員の役割も大事ですね。

岩本：いずれ社会人になるので、教わるばかりではだめだと思んです。アウトプットしていかないと自分の身につかない。で、環境教育はしたかったので、綺麗にそこにハマった感じです。

部活、サークルも活動がなかったので、人付き合い、人間関係構築という意味でも学びになります。あと、役所の方々など、社会人との関わりなんかも大事だと思います。

- 1年生の後輩が参加してくれているという話ですが、どういうきっかけ？

岩本：春の新入生歓迎会で、先輩スタッフをやったんです。その時に先輩たちによる学生活動紹介があって、そこ



でみんな、部活、サークル、ボランティア、学内プロジェクトなどの話をしたんです。でこの時、プロジェクトがどういうものなのかを説明するときに、エコ推進プロジェクトの話を原田くんがして、興味を持つ1年生が現れてくれた。

- なるほど、それは良い宣伝機会になるね。1年生もいるいるなことがわかるし。

原田：そうしたら、あとから連絡が来たんです。山岳部に入ってきた学生が、「プロジェクトもやってみたい」「自分たちで道を切り開いていきたい」ということで。ライン交換して。

- ラインなんだ。今風ですね。

原田：もう一人は、その1年生経由で連絡。もう一人入りたいって言っている。ラインで。それで、入ることになった。

- 良いつながりですね。そうしたつながりを大事にしていったらいいと思うのですが、部活、サークルも含めて、どうして行ったらいいでしょうか。

岩本：授業だけでなく、学生生活動の紹介は大事だと思います。新入生歓迎会などで。ですから、歓迎会のメ

ニューに入れて、なんというか、制度化したらいいかな、と思います。

- 宣伝、それからより多くの人に集まってもらうにはどうしたらいいと考えていますか？教えてください。

原田：16号館に、デジタルサイネージっていうんですか、モニターがあって、あれにいろいろな部活の紹介が出てきます。あれはいいですね。エコ推進プロジェクトも、これから宣伝できればと思います。

- なるほど。

岩本：それから今取り組んでいるのは、インスタグラムです。フォロワー数増やすのが大事。まずは大学公式のアカウントをフォローすると、大学アカウントのフォロワーにおすすめアカウントとして表示される場合がある。その両方で、他のプロジェクトのアカウントのフォロー、部活のアカウントのフォローをしていながら、機会を活かす、増やす。

- 今どきですね。

原田：あとは、入学式のときに、学生自治会とかがちらしなんかを椅子の上において配るんですがそういう中に部活、サークル、プロジェクトなんかのものを一緒に配布できたらいい。

- 楽しみながら、つながっていく。いいですね。これからの活動も期待しています。今日はありがとうございました。

学会主催見学会

学会主催見学会

Tours Sponsored by the Academic Society



令和6年度 写真・イラストコンテスト(写真部門)努力賞作品
『ヒカリのしずく』
吉崎 哲史(工学部 機械工学科)

「関西国際空港見学会」感想

池上 悠熙

この見学会に参加しようと思った理由は、昨年初めて関西国際空港を利用した際に空港で働く方々を目にし、空港の職業に興味を持ったからです。今回は、大阪税関と関空裏側バスツアー、展望スカイデッキに行きました。

大阪税関ではまず、実際に摘発された密輸品やコピー商品について説明を受けました。以下の写真は、違法薬物の密輸に使用されたスーツケースです。スーツケースは底が二重になっており、ここに薬物が敷き詰められていたと言われていました。他にもウィッグの下に金が仕込まれていた時の様子など、普通に生活しては思いもつかないような方法で摘発されており、とても興味深い内容でした。



次に、麻薬探知犬によるデモンストレーションが行われました。実際にハンドラーをされている方がペアの探知犬とともに麻薬のにおいを嗅ぎ分ける様子を見て、人間と探知犬がペアを組むと、さらに強い力になることを実感しました。ハンドラーとは探知犬を使って薬物の摘発をすること、トレーニングだけでなく担当犬の健康チェックも行っているそうです。探知犬になる犬はどんな種類でも良いというわけではなく、高い荷物にも背が届くような身長のある種類が多いと説明されました。空港で見る探知犬がいつも似た種類に見えるのは、こうやって選ばれているからなのだと納得しました。

最後に、税関で働いている現役の職員さん3名からお

話を聞きました。ハンドラーになりたかったという職員の方は、訓練期間中犬の健康管理も毎日行っていた中で、実際の現場で訓練の成果を出せた時や、自分で犬を成長させることが出来たことが嬉しいと言われていました。学生時代にこう過ごしておけばよかったと思うことなど、学生向けのアドバイスもしてくださり勉強になりました。3名それぞれに仕事のやりがいや思い入れが感じられ、生き生きと話す職員の方々を見てると、税関での仕事はただ大変なだけではないのだと感じました。

関空裏側バスツアーでは、関西国際空港ならではのお話を聞きながら、普段は入れない区域までバスで案内していただきました。電車のような見た目の無人エレベーター「ウイングシャトル」や、広大な駐機場などを見ることが出来ました。以下の写真は、AASCという機内食工場で働くフードローダー車です。これは航空機に機内食を積み込むための車両で、箱形で飛行機の高さに合わせて昇降します。子ども食や宗教食もここで出来、とくにイスラム教食は徹底的に管理された厨房で作られていると聞いて、世界中から利用者が訪れる空港ならではの工夫だと思いました。



また、ここまで大きい飛行機でもすべて人の手で掃除されており、飛行機全体を洗うと使用する水は20トンに及ぶと言われていました。大きいからといって機械で掃除するのは人間が行っているところに、飛行機を大切に

扱う想いが感じられました。

展望スカイデッキでは、関西国際空港島の全体模型や、空港の歴史、ウイングシャトルなど空港設備の詳しい説明を見ることが出来ました。全体模型を見ると飛行機の大きさに対して空港が広大で、飛行機が飛ぶのに必要な土地の広さを知りました。

関西国際空港見学会に参加して、お客さんとして空港に行くだけでは分からない空港の裏側や、空港を支えてい

る方々についても知ることが出来ました。税関は普段接する機会が少ない場所ですが、多くの人とその思いに支えられて動いているということを実感しました。今まで知らなかった税関の職業について知ることが出来た上、職業選択をする際の選択肢が広がり大変勉強になった1日でした。

(国際学部 国際学科)

愛知交通産業見学会 感想文

西村 慶太

図書館前にある掲示板で本見学会の案内を見たとき、私は直ぐに申し込みを行うサイトを開いていました。日本が誇る自動車産業、その成り立ちや技術の進歩について肌で感じることができるよい機会だと確信したからです。この考えは良い意味で覆されました。それは「物よりも体験を大事にすると良い」と語っていたある人の言い分の正しさを裏付けるような結果でした。この言葉こそ、私が本見学会に参加した理由の一つでした。

9月11日の朝、私は眠い目をこすりながらも胸に期待感を抱いていました。この日の一週間前に行われた関西国際空港見学会にて、期待以上の体験と知見を得たことから本見学会に対する期待が高まっていたからこそその期待感でした。バスに揺られながら、図書館で借りた書籍を読んでいると3時間近くの移動時間もあっという間に過ぎていきました。車窓から見た最寄り駅の愛知高速交通東部丘陵線の芸大通駅を横目に少し行くと、トヨタ博物館が見えてきました。「次にトヨタ博物館に行くときは、この駅を利用するのかもしれない」と帰り道で思ったことを覚えています。トヨタ博物館に入場して真っ先に目に飛び込んできたのは、トヨタ初の量産型乗用車であるトヨタ・AA型乗用車、そのレプリカでした。

当時の自動車には、現在と似て非なる部分が多々ありました。例えば、現在の車両に搭載されている車内で掴まるためのハンドルが数十センチの縄のようなものになっていたことや、クラク



ションも風船状の袋を握ることで空気を送り出して鳴らすラッパのようなものが搭載されていたことです。このAA

型乗用車を横目に階段を上ると、年代毎に分けられた車両の展示スペースが広がっています。私の想定を超えていた部分としてこの展示スペースを挙げることは当然のこととすることができます。なぜなら、この展示スペースにはトヨタをはじめ日本車だけでなく、外国企業の車両が数多く展示されていたからです。この博物館の名称はトヨタ博物館であるため、私はトヨタの車両の展示が大半を占めるのではないかという予想を持っていたため、特に外国企業の車両が多く展示されていたことに対し、この博物館が単にトヨタという企業を紹介する場ではなく、車の歴史を展示する場なのだということに思い至り、感銘を受けました。また、トヨタ博物館で配布されているパンフレットによると年に数回、博物館の駐車場にて展示車両の走行を披露しているとのことなので、展示されている車両を見て想像する以上である実際の走行を見ることができます。この点がこの博物館の世界の自動車とクルマ文化の歴史を紹介するというコンセプトをよく表していると言えます。

トヨタ博物館を出発し、1時間程移動すると中部国際空港に着きました。ここでは、空港内に設置されている旅客機の展示や部品、航空産業について学ぶことができる「フライト・オブ・ドリームズ」という施設を見学しました。また、実際の旅客機の操縦室を見ることができる他、フライトシミュレーターの体験をすることができるため、実物とシミュレーターとの比較やそれに伴って想像を膨らませるといったことが可能です。例えば、シミュレーターでは、ガイドの方が全般的な指導、サポートをするために実際の操縦室には無いような設備があります。実際の旅客機に搭載されている設備は、シミュレーターよりも複雑に映り、その違いとシミュレーターでの体験から実際に職務において操作している操縦士の方々に尊敬の念を覚える程でした。実際の設備には、一時的に使用するオートパイロットという自動操縦機能が搭載されていることを考慮しても、操縦士の方々の技術は実に傑出したものであり、職人技と称することができるのではないかと思います。



▲実際の操縦室



▲シミュレーター

このように、私は今回の愛知交通産業見学会に参加したことで素晴らしい体験と知見を得ることができました。是非とも、他の学生にも参加してほしい内容です。

最後に本見学会に従事してくださった方々に感謝を申し上げます。

(経済学部 経済学科)

日本の歴史や天体に触れて

三枝 加奈

今回、私は日本の歴史や時と宇宙の関係性について学ぶことができる貴重な機会として、姫路城と明石市立天文科学館の見学会に参加しました。

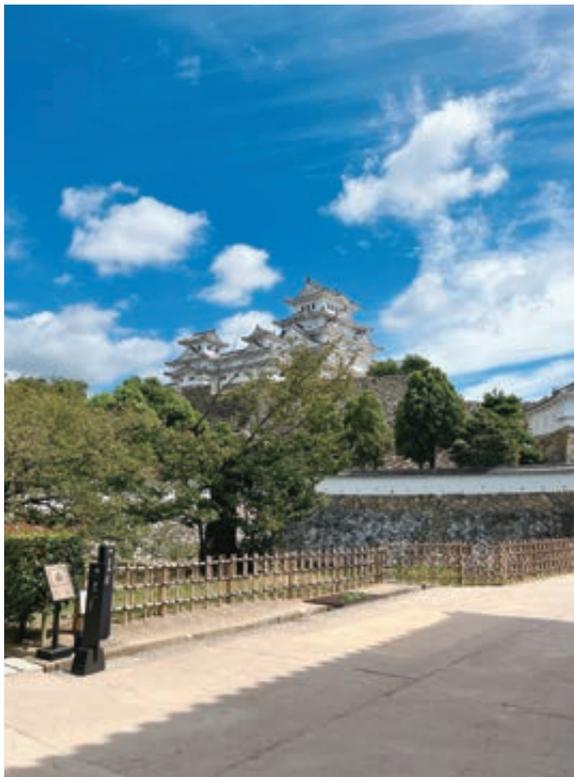
まず訪れたのは、世界文化遺産に登録されている姫路城です。姫路城に初めて訪れましたが、別名「白鷺城」とも呼ばれているように、真っ白な城壁で、圧倒される美しさでした。観光客の中には多くの外国人も見られ、日本初の世界文化遺産として高く評価されていることを実感しました。天守閣は見る角度によっても印象が変わるので、非常に興味深かったです。そして、姫路城は外観の美しさだけでなく、木造建築としての優れた技術も兼ね備えていることがわかりました。当日の気温は30度を超える猛暑日でしたが、天守閣内は風通しが良く、涼しく感じられました。大天守の階段は急勾配で、最上階まで登るのは少し大変でしたが、頂上から眺めた姫路市内の景色は絶景で感動しました。歴代のシャチホコも展示されており、その時代ごとの形状や装飾の違いを楽しむことができました。声優

の鳥海浩輔さんと小野友樹さんのプレミアムオーディオガイドを聴きながら見学したので、姫路城の歴史や城郭の仕組みについて深く学ぶことができました。姫路城は季節や時間ごとによっても、異なる魅力や楽しみ方があると感じたので、次回は他の時期にも訪れてみたいです。

次に、姫路城の大手門前にあるお店の「高田の馬場」というお食事処で昼食をいただきました。姫路城を眺めながら食事を楽しむことができたので良かったです。

最後は、日本標準時子午線上に位置する明石市立天文科学館に訪れました。明石市立天文科学館では、天体や時間に関する資料が数多く展示されており、普段触れる機会の少ない天文の世界に触れることができたので楽しかったです。

日時計広場には、自分の影を使って時刻を測る人間日時計のコーナーもありました。人間日時計は月ごとに立つ位置を調整することで、影が時刻を示す仕組みになっており、実際に体験しながら、時間の測り方について学ぶこ



とができました。展望室からは目の前に街並みと海の景色が広がっていて絶景でした。明石市立天文科学館から見渡す景色は、姫路城とは異なる美しさがあり、また別の感動を味わうことができました。明石市立天文科学館には日本最古のプラネタリウムがあり、今回初めてプラネタリウムを体験しました。私はこれまで意識して星を見るという機会はあまりありませんでしたが、様々な星についての知識を深めることで、星空を眺めることの楽しさを再発見することができました。また、誕生月でおなじみの12星座だけでなく、きりん座のような珍しい星座についても学ぶことができました。現代ではスマートフォンなどを使って簡単に方角を知ることができますが、昔の人々は星を頼り

に方角を測っていたことを知り、その知恵や工夫に改めて感心させられました。見学会が中秋の名月の翌日ということもあり、帰りのバスでは綺麗な満月を見ることができました。

今回の見学会を通して、歴史ある建造物や天体に触れて学びを深めるとともに、他の学部の後輩たちと交流を深めるきっかけにもなったので、貴重な経験となりました。今後も様々な分野に興味を持ちながら、こういった見学会にも積極的に参加し、自身の視野をさらに広げていきたいです。

(デザイン工学部 建築・環境デザイン学科)

美術館建築における一体感と視覚体験

切建 尚也

今回の豊田市美術館、博物館の見学を通して、空間とモノの関係は私たちの日常生活や周囲の環境において大きな意味を持っていることを、改めて実感しました。空間がどのように築かれ、私たちにどんな影響を与えたのかを考えると、デザインや建築の奥深さに驚かされました。モノと空間の関係性は、単なる物理的な配置だけでなく、その空間がどのように感じられ、どのような効果を生み出すのかを理解することが大切だと感じました。

特に、空間における目線の高さがもたらす影響には新鮮な驚きを覚えました。視点の高さが変わることによって、同じ空間でも全く異なる雰囲気を感じさせることがあり、空間デザインがいかに繊細であるかを再認識しました。

また、空間を感じさせるモノには、大きさや形状だけでなく、素材感や色、さらには照明の影響も関係していることを学びました。光の加減や反射によって空間の雰囲気が柔らかくなったり、鋭くなったり、息をのんでしまうような興味深い発見でした。モノ同士の関係性が空間を作



り、その調和が空間全体の印象に大きな影響を与えることを考えると、設計者が空間をどのように作り上げているのかが分かるような気がしました。

豊田市美術館の建築は、その空間の連続性が特に印象的でした。館内にはドアがなく、展示室を移動するときに自然と視点が移動するため、その移動自体が一種の楽しみになっていました。これにより、空間の移り変わりを体験しながら新たな視点を楽しむことができました。展示室間の境界がないため、作品を鑑賞する中で一つの流れとして空間全体を体験し、一体感を味わいました。この一体感は、来館者が空間に没入する感覚を生み出し、展示の魅力により一層引き立てているように感じました。

この連続性は、訪れる人々に建物内外をスムーズに移動する体験を提供し、豊田市美術館が単なる美術展示の場を超えた空間そのものの魅力を味わわせてくれる場所であることを実感しました。

今回特別に常設展示のガイドをしていただいた学芸員の天野一夫氏の解説により、モノと空間がどのように関係しているのかを探る過程で、一つ一つのモノが持つ意味や配置の重要性を改めて知ることができました。関係性のあるモノを配置することで空間に統一感が生まれ、調和が取れる一方で、異なる要素を組み合わせることで空間に緊張感や動きが生まれ、新たな視点をもたらしてくれました。こうした視点で空間を観察すると、今まで見過ごしていた細部に気づくことができ、学びが深まりました。

また天野氏の説明により額縁の違いについても考えさせられました。額縁は単なる装飾だと思われがちですが、そのデザインや色、素材によって空間全体の雰囲気が変わることを知り、その奥深さに感動しました。例えば、重厚感のある額縁は空間に高級感をもち、シンプルな額縁は軽やかで開放的な印象を与えることが理解できました。小さな要素であっても空間全体に与える影響は大きく、その重要性を実感しました。

空間とモノの関係性を考え、設計や配置を工夫するこ

とで、空間が単なる物理的な場所以上のものになったと
いうことを強く感じました。空間は感覚的な体験を生み出し、心理的な影響を与える存在に変わり、こうした視点を持って空間を見つめることで、日常生活の中でも新たな発見が生まれ、より豊かな体験が得られたのではないかと思います。

(デザイン工学部 建築・環境デザイン学科)



自然と調和し発展する港町の魅力を体験

Nguyen Quoc Hieu

人と防災未来センター見学会・神戸海洋博物館

今回の見学会では、人と防災未来センター、神戸の中華街、神戸海洋博物館・カワサキワールド、そして神戸ポートでの観光船クルーズを通じ、神戸のさまざまな魅力や学びを体験した。

まず、人と防災未来センターでは、阪神・淡路大震災の記録や復興の歩みを実感できた。センターは、震災の記憶をリアルに伝えるさまざまな展示が充実している。震災時の状況を再現したジオラマや、映像・音声で震災の様子を再現するシアターがあり、訪問者に災害の恐怖やその後の復興の過程を体験的に感じてもらえる工夫がなされている。また、震災の記録や被災者の証言、救援活動の記録も展示されており、災害の被害の大きさや復興にかけた人々の努力が伝わってきた。震災当時の映像やジオラマを通して、災害の恐ろしさを肌で感じるとともに、復興に携わった人々の努力や、現在も続く防災・減災の重要性を学んだ。災害時にどう行動すべきかをシミュレーションで体験し、自分自身の防災意識が高まる貴重な機会となった。



続いて訪れた中華街(南京町)では、異国情緒あふれる街並みと活気ある雰囲気にも包まれながら、食べ歩きを楽しんだ。南京町広場の中心にある八角形の東屋や色鮮やかな門が印象的で、まるで中国に訪れたかのような気分を味わった。



神戸海洋博物館では、海に囲まれた日本の「海事産業」の重要性を学ぶ貴重な機会を得た。博物館に入ると、まず目を引いたのはホールの中央にそびえ立つ古代船の巨大な模型である。その周りには、海事産業の発展を象徴するかのように、小型船舶の模型が時代順に並べられており、一つ一つの船がどのように進化してきたかを視覚的に理解することができた。これらの展示は、まさに日本の海事産業の歩みを目に見える形で教えてくれた。

特に印象的だったのは、日本の造船技術の歴史に関する展示である。精巧に作られた船の模型を目の前にすると、長い年月をかけて積み上げられた技術や知恵が感じられ、自然と敬意の念が湧き上がってきた。また、最新の船舶や技術に関する展示では、日本の技術力が今もなお世界の最前線で活躍していることを実感した。

また、博物館の建築やインテリアデザインにも感銘を受けた。建物のデザインは、まるで帆船の帆や波のように見える白い網目状の構造が印象的である。この構造は、海や風のイメージを取り入れており、神戸という港町の自然や文化と深く結びついていると感じられる。特に、屋根に設置された天窗は、自然光を取り入れる工夫として機能しており、自然光が2階部分に集中するようにデザインされているため、その光が展示物を照らし、館内に明るく開放的



な雰囲気をもたらしていた。

カワサキワールドでは、船舶だけでなく航空機や新幹線の展示もあり、日本の輸送技術がどのように進化してきたかを知ることができた。実際に触れられる展示やシミュレーション体験も豊富で、特に船の操縦シミュレーターを体験した時は、本当に船を運転しているような感覚を味わうことができ、とてもワクワクした。こうした体験型の展示は、ただ見るだけでは得られない「リアルな感覚」を感じさせてくれ、カワサキの技術力やものづくりの魅力を深く実感することができた。



最後に、観光船クルーズでは、美しい海岸線を眺めながら、港町神戸の景観を楽しむことができた。クルーズ中は、爽やかな海風が心地よく、忙しい日常を忘れてリフレッシュするひとときとなった。船上からは神戸ポートタワーや神戸港周辺の眺望が広がり、爽やかな海風を感じなが

らのクルーズは、見学会での学びをゆっくりと振り返る穏やかな時間となった。



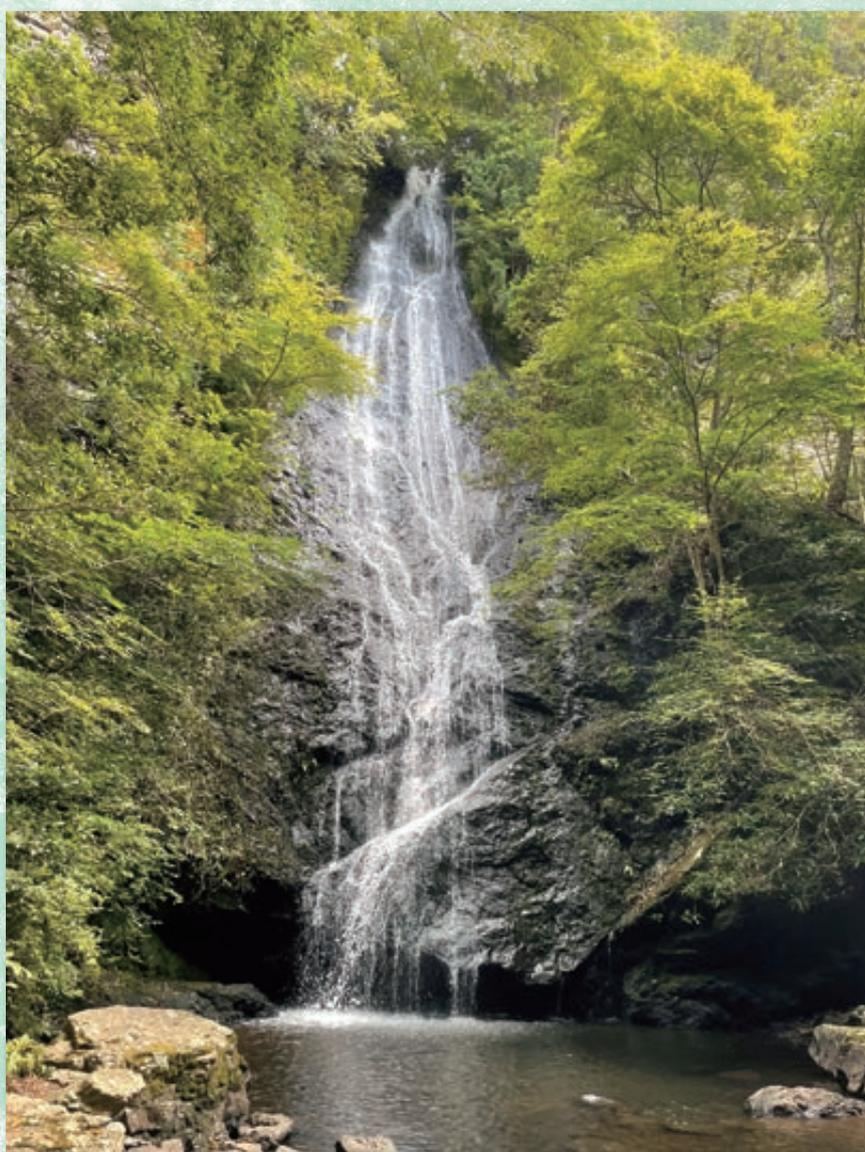
この見学会を通じて、神戸が日本の経済や観光にとって重要な役割を果たしていること、そして技術や人々の努力が日本全体の発展に貢献していることを学んだ。それだけでなく、経済の発展とともに神戸が自然との共生を大切に、自然との調和に基づく都市として成り立っていることを実感した。

(デザイン工学部 環境・建築デザイン学科)



▲令和6年度 写真・イラストコンテスト(写真部門)応募作品
『雨が降る前に』
佐野 太志(デザイン工学部 建築・環境デザイン学科)

コンテスト報告



コンテスト報告

Excellent Works of the Contest

令和6年度 写真・イラストコンテスト(写真部門)応募作品
「琴滝」
安富 颯雅(デザイン工学部 環境理工学科)

コンテスト報告

令和6年度 企画委員長 笹岡 敬

第25回「ぶんかくコンテスト」 (長編部門／短編部門)

第9回「写真・イラストコンテスト」 (写真部門／イラストデザイン部門)

第7回「見学会プランニングコンテスト」

本年度の学会主催コンテストの応募者は「ぶんかくコンテスト」が3名、写真部門が19名、イラストデザイン部門が5名、見学会プランニングコンテストが1名の応募があった。ぶんかくの優秀賞、経営学部経営学科の西川宗一郎君の「日高書店経営日誌」は読者を引き込む文章力が審査委員に認められ評価された。

写真部門の優秀賞、工学部電気電子学科の佐藤優生君の作品「繋ぐ未来への花」は撮影者の撮影技術と編集力と、学会誌の表紙に相応しいのではという点が評価された。

イラストデザイン部門の優秀賞、工学部交通機械学科の河村隼吾君の作品「画虎点睛」は作品の躍動感と細部まで描き込まれている緻密さが評価された。

見学会プランニングコンテストの奨励賞、工学部機械工学科の山口大輝君の作品、「福井芸術見学会」はプランの実現可能性は評価されたが、場所の選定理由の弱さから次点となった。

例年と同様に写真部門の応募が多いのは、映像優勢社会により学生にとって写真が身近になってきている現れだろう。イラストデザイン部門については昨年よりコンピュータによるデジタル表現が増加しており、それも今日の状況を示している。しかしながらそのことにより、本学の学生の表現力が上がってきているのも今日の特徴であるのかもしれない。ぶんかく、見学会プランニングについては、本学に特に専門とする学科が無いのにも関わらず、本年も積極的に応募があったことは喜ばしいことである。

大阪産業大学学会 コンテスト2024

Osaka Sangyo University Academic Society
Contest 2024

大阪産業大学学会主催

Let's try!
日頃書き溜めている文章やイラスト、この一年の思い出の風景写真、学会見学会キャラクターなどをこの機会にご応募ください！

応募期間
2024年9月24日(火)～10月11日(金)
締切厳守

＜募集コンテスト＞
◆ぶんかくコンテスト
◆写真・イラストコンテスト
◆見学会プランニングコンテスト

優秀賞 賞状・Quoカード5万円分
奨励賞 賞状・Quoカード2万円分
努力賞 賞状・Quoカード1万円分
参加賞 Quoカード1,500円分
※参加賞は抽選で抽選しない応募作品が対象
(但し、後援研究奨励賞のみ)

夏学期中の思い出
を文章や写真・イラスト
にして応募してみま
せんか？

【応募方法】
学会Webサイトの応募フォームよりご応募ください
【お問い合わせ先】
大阪産業大学学会事務局
【本部6階 産業研究内学務室内】
(平日) 10:00～16:00
TEL: 072-875-3001 (内線: 2815)
MAIL: gakkai@cmt.osaka-sandai.ac.jp

▲2024年度学会コンテストチラシ

大阪産業大学学会コンテスト2024実施結果

募集期間 2024年9月24日(火) ～ 2024年10月11日(金)

第25回 ぶんかくコンテスト実施結果

審査日 2024年11月19日(火)
募集内容 長編部門・短編部門
応募件数 長編部門……………2件
短編部門……………1件

〈受賞者一覧〉

[長編部門]

【優秀賞】

西川 宗一郎(経営学部 経営学科)
作品：日高書店経営日誌

【奨励賞】

北田 流空(経営学部 経営学科)
作品：役割

[短編部門]

【努力賞】

近藤 聖那(国際学部 国際学科)
作品：第七宇宙、異常あり

〈審査委員〉

朴容寛、張黎、今中舞衣子、福森徹、村田育也、
坪田芳範、齋藤立滋、李東俊、本田雅子、窪誠、藤永壮
(順不同、敬称略)



▲西川宗一郎さん



▲北田流空さん



▲近藤聖那さん

第9回 写真・イラストコンテスト実施結果

審査日 2024年11月19日(火)
募集内容 写真部門・イラストデザイン部門
応募件数 写真部門……………26件
イラストデザイン部門… 6件

〈受賞者一覧〉

[写真部門]

【優秀賞】

佐藤 優生(工学部 電子情報通信工学科)
作品：繋ぐ未来への花



▲佐藤優生さん

【奨励賞】

水瀧 岳大(工学部 電気電子情報工学科)

作品：金色に輝く夏の思い出

【努力賞】

吉崎 哲史

(工学部 機械工学科)

作品：ヒカリのしずく

[イラストデザイン部門]

【優秀賞】

河村 隼吾

(工学部 交通機械工学科)

作品：画虎点睛

【奨励賞】

切建 尚也

(デザイン工学部 建築・環境デザイン学科)

作品：デジタルフローと都市の脈動

神崎 竣

(デザイン工学部 建築・環境デザイン学科)

作品：いつかの思い出

【努力賞】

河村 脩平

(デザイン工学部 情報システム学科)

作品：揺れる午後

〈審査委員〉

笹岡敬、吉田雅一、鶴田哲也、島野光司、伊藤一也、
川野大輔、姜文淵、矢来篤史、塩見剛一、瀬戸田克、
正見こずえ、廣田音楽、

(順不同、敬称略)



▲水瀧岳大さん



▲吉崎哲史さん



▲河村隼吾さん



▲切建尚也さん



▲神崎竣さん



▲河村脩平さん

第7回 見学会プランニングコンテスト実施結果

審査日 2024年11月19日(火)
募集内容 日帰りで実施可能な見学会プラン
応募件数 1件

【奨励賞】

山口 大輝(工学部 交通機械工学科)
プラン名：福井芸術見学会



▲山口大輝さん

〈審査委員〉

笹岡敬、吉田雅一、伊藤一也、矢来篤史、今中舞衣子、
坪田芳範、窪誠、廣田音奏

(順不同、敬称略)

令和6年度 見学会プランニングコンテスト実施報告

2024年9月18日(水)

姫路城&明石市立天文科学館見学会

～第6回プランニングコンテスト優秀賞プラン～



日高書店経営日誌

経営学部 経営学科 西川 宗一郎

第零話

ぼつんと佇む木造二階建ての建物。細工の施された美しいガラス戸は開けるたびにガラガラと音が鳴り、店内には古めかしい紙のにおいが充満している。二階まで貫かんとするほどの高さのある、壁と一体化した本棚にはびっしり所せましと色々な本が陳列されている。文庫本に単行本、百科事典に図鑑まで……小さな外見からは想像もつかない蔵書を誇るこの古本屋。

ここには、変わったお客さん——成仏できなかった幽霊さんたちがやって来ます。

天国でも地獄でもない。本に関する未練を残した人たちが、死に切れぬままその未練に導かれやってくる。

そんな古本屋、『日高書店』。

切り盛りするのはこの店の看板娘で店主、「日高聖」ただ一人。

肩のあたりまで伸びた後ろ髪は綺麗に整えられ、目許には知的にも見える丸眼鏡が光を屈折させ、淡いカーディガンを羽織った若店主。店の奥に見える番台のようなカウンターに腰掛け、飽きもせず店の文庫本に目を落とし、原稿用紙をカウンターに準備し、今日も今日とてお客さんを歓迎する。

ガラガラガラ……バンッ……

「ふう……」

古く重たい引き戸を開けるとガラスが音を立てて、今日もお店が開かれた。

第一話

私、「日高聖」は今日も今日とて古本屋、「日高書店」の番台に座っていた。

ここは天国でも地獄でもない、生死の狭間にぼつんと軒を構える古本屋。店にある無数の本の中から面白そうな小説を引っ張り出して店番をしながら読みふける毎日。

私の本をめくる音だけが響くこの店内に、ガラガラガラ……ガラス戸が開く音が響いた。

「こ、こんにちは」

「いらっしやい」

文庫本から目を離すと、店の前にはまだ若い、スーツを着た男性が立っていた。風貌から社会人四年目のサラリーマンってところだろうか。

サラリーマンさんは店の壁一面に埋まっている本を見上げて驚き慄いていた。

外から見たらただの小さな二階建ての古本屋さんだけど、中を見ればレールでつながった専用の梯子を使わないととれないような高さまで本がびっしり埋まっている。驚くのも無理はない。

「何かお探しですか？」

何かは分からないが、何かを探している様だったので尋ねてみた。

「あ、いえ、ここに来る直前に読んでた本、あたりしなかなって」

「ここに来る、直前ですか？」

つまり、死ぬ間際に読んでいた本ということだ。

「ええ……なんとなく感覚で分かるのですが……俺はもう生きてはいないのでしょうか？」

ひどく落ち着いた様子で、サラリーマンさんは自分の死を確かめた。

「包み隠さず言えば、そうなります」

「ですよね。妙に身体は軽いし、さっきまであんなに怖い状況に置かれていたのに頭はすごく澄んでるし、思い出しなくても怖くもない、まるで他人事みたいで……死ぬの

が怖くないのは、もう死んでいるからですよね」

自分の死を微笑みながら伝えるサラリーマンさんに私は頷きだけ返した。

「俺には妻子もないし、両親にも返せるものは返したつもりです。悔いなんてないと思ってたんだけど……まさか直前に読んでいた本の続きが気になるだなんて」

サラリーマンさんは、今度はおかしくて笑いを堪えられないと言った雰囲気です。

「案外そういうものですよ。ここに来られる方たちは」

「へえ……なんかあっけないですね」

この人の死因は後に分かるのだが、通勤途中の電車での脱線事故だ。

満員電車だったこともあり、横転した車両の中で窒息し、人の重さで圧死。考えたくもない死因のはずなのに、当の本人は「あっけない」って言葉で締めくくった。

「それで、タイトルの方は？」

「ああ、そうでした。えっと——」

タイトルを教えてくれたサラリーマンさんは茶化すように言葉を続けた。

「結構新しめの作品なんですけど」

「ありますよ」

「え？」

たしかに新しいタイトルだ。まだ出版されて半年も経っていない。

だけどそんな本でもあるのがこの日高書店だ。

私は番台から出て、梯子の位置を調節、軽快に登っていく。

「ええっと、たしか……」

背表紙の記憶と、配置の記憶をたどって梯子に足を掛けながら本を探す。

「あ、ありました」

すると案外すぐに見つかった。水色の背表紙の本を手に取り、なれた足取りで梯子を下りる。

一応、手渡す前に簡単に埃を払ってからサラリーマンさんに見てもらう。

「こちらですよ？」

「ああ、すごい！ これですこれです！」

サラリーマンさんはうれしそうに私から本を受取った。

少し自然風と空気にさらされて新品同様とはいかないが、読むだけなら全く問題はない。

「これほんとに最近出たばかりの本なのに、よくありましたね」

「ふふっ、見つかってよかったです」

口元を手で押さえて軽く笑ってはぐらかした。

サラリーマンさんは受け取った文庫本をあまりに大事そうに抱えていた。

「俺、電子で読んでたんですけど、紙だとこんな感じなんですね」

「たまには紙もいいですよ」

「あの、これ」

「もちろん読んでもらって構いませんよ」

興奮冷め止まぬサラリーマンさんに、私は番台の裏からスツールを持ってくる。

「わざわざありがとうございます」

「いえいえ本を読むための古本屋ですから……あ、コーヒーかお茶、どちらがいいですか？」

「え？ そんな、悪いです」

「私も飲むので、ついでです」

「……でしたら、コーヒーを」

「はい」

私は番台の裏の暖簾をくぐって、完全に私個人の居住スペースに入る。コーヒー粉の入った瓶を開け、二杯分すくいドリップする。ちゃんと紙フィルターで淹れたコーヒーだ。酸味よりもキリッとした苦味の強い私好みのコーヒーが二杯できあがった。

マグカップとソーサーを邪魔しないようにサラリーマンさんの隣に置く。「ありがとうございます」とお礼を言われたので、簡単に会釈だけ返し、私は私で番台に戻り、読みかけの文庫本に手を戻しながら一口コーヒーを啜って、読書の時間に戻った。

しばらくするとサラリーマンさんの方からパタンと本を閉じる音が聞こえました。

ちらりと視線をやると文庫本を片手に持ちながら伸びをしているサラリーマンさんが見えました。コーヒーも飲み切っていた。

「いやあ、ほんとにスッキリしました」

「それはよかったです」

声をかけられたので私も葉を挟んで文庫本を閉じます。

「どうでした？」

私は何気なく感想を聞きました。彼の頭の中では今読み終えた小説のことでいっぱいでしょうから。

「うーん……………正直に言えば、あまり肌には合わなかったです」

「あら、それは残念」

まさかの酷評でした。

「本筋は面白かったんですけど、文章構成がどうも苦手です……でもまあ続きは気になるので読み進めたんですけど、ずっと癖のある文体に集中力を削がれていたというか、なんというか」

こればかりはどうしようもない。それが味になる事もあれど今回のように雑味になる事もある。だからこそ全員が気に入る本なんてこの世に存在しない。だからこそ、面白いし、勉強になる。

「あと、キャラクターも、嫌われ役がほしいのは分かるんですけどもうソイツがほんとクソで、俺にはそれがいいとは思えませんでしたね。ヒロインにナンパするところなんてもうほんとに——」

サラリーマンさんは肌に合わなかったと言っておきながら饒舌に感想を口にしてくれました。こういう人の本の感想を聞くのが私はたまらなく好きでした。

「あ、すみません、自分ばかり」

「いえ、本を読み終えたすぐってのは誰だって人に話したいものです。せっかくここにいるんですから、お話くらい聞きます」

「そう言っただけだと助かります……はあ、これが俺の読書遍歴最後の一冊か」

サラリーマンさんはどこか落胆しながら自嘲気味に笑って見せました。

「何か他のも読みますか？」

幸いここは古本屋です。本だけはたくさんあります。

「いえ、もう大丈夫です」

そう言うとサラリーマンさんはスツールから立ち上がり、まるで何かを確かめるように拳をグーパーと何度か握りました。

「あ」

するとサラリーマンさんの身体から光の粒子のようなものがぼつぼつと湧いてきました。

何度も見たことのあるこの光景。ここに来た人が未練を無くし、無事に成仏するときに出る粒子です。サラリーマンさんからその粒子が出ているということは、この人は死に際に読んでいた本を読めて未練を全て無くされたのでしよう。

「コーヒー、ありがとうございました。あと、紙の本もいいですね」

「たまにはいいですよ」

また来てください。なんて言えるわけもなく、天国にも紙の本があることを密かに願う。

「あ、そういえば」

サラリーマンさんは消え入る間に、何か思い出したかのようにこちらを見て言った。

「あなたは どうしてこんなところで店番をやっているんですか？」

第二話

今日も今日とて、いつものようにカウンターには原稿用紙を広げながら、文庫本を静かに読んでいたのですが、今日はそんな静かな店内にガランッ！ と大きな音が響きました。

「ここは本屋か！」

入口に目をやると、ガラス戸を勢いよく開けた七十代ほどと見られる男性がそう大きな声で叫びながら立っていました。

「え、ええ、そうですが」

「探しとる本がある！」

おとうさんはずけずけと店内に入って来て私の前に立ちます。

「ど、どのような本ですか？」

思わず私も背筋が伸びます。見るからに頑固親父って感じの風貌で、眼光も鋭く言葉も大きく大雑把です。

「白い文庫本だったのは覚えとるが、内容もタイトルも分からん！」

「えええ……」

思わず気の抜けた声が出てしまった。こんな大雑把なのは始めてだ。

「しよ、少々お待ちください」

一度店内を見回ったが、白い文庫本なんてたくさんあって全く絞れない。

「も、もう少し何か情報はないですか？ 小説だとか、エッセイだとか」

「わからん」

「しゅ、出版された年代とかは」

「知らん！」

もうどれだけ長い間この古本屋の番台に座っているかもう分かりませんが、はじめて泣きそうです。こんなに無謀な本探しは初めてです。

でもめげずに何冊も見繕ってお渡ししてみました。しかし全部違うとのこと。

とほほ……と途方に暮れそうになりました。

しかし、ずっと胸の中でくすぶっていた違和感に一縷の

望みをかけて、徐々に苛立ちがみえはじめたおとうさんに勇気を振り絞って尋ねてみることにしました。

「あの、ご自身で読まれた本ですか？」

「ん？ 違う！ わしは本など読まん」

やっぱりそうだ。

別に今まで読んだ本全部を覚えているかと言われれば絶対にそんなことないし、記憶に残らない本もたくさんある。でも、死に際に未練を残した本に関してそれは少しおかしい。

すると案の定だ。このおとうさんは本を読まない。

じゃあなんでこんなところに？

その“白い文庫本”に未練を残しているんだ？

「その本はおとうさんご自身が読みたいから探している本ですよ？」

「当たり前じゃ」

日ごろ本を読まない人が死に際に焦がれて探すような本。

「どうして読みたいと思ったんですか？」

「どうしてじゃと……？ それが何の関係がある」

「皆さん読む本には理由があります。作家さんが好き、タイトルに興味を引かれた、今売れてる人気な本だから、映画や漫画などのメディアミックスが面白かったから、知りたいこと、勉強したいことがある、表紙が良かった……なんだっていいんです。それを聞けば、どんな本かは多少絞れるかもしれません」

つい少し長く話してしまいました。

おとうさんはそれを聞いて少し黙ってから気恥ずかしそうに言葉を詰ませました。

「……家内が、大切にしとったからじゃ」

「奥様が？」

「毎朝、わしが起きるまで、朝飯を作り終えてからの少しの時間に必ず読んどうたんじゃ。家に一つしかなかった老眼鏡をかけて、起きたら新聞を読むわしに気を遣って読むのをやめるんじゃ……いつだったか、どんな本なのか尋ねるといつもは静かな家内がものすごく饒舌に話とったのは覚えとるんじゃが、内容までは忘れてしもうた」

それまで高圧的だったおとうさんが嘘のようにしっぽり

と奥様の話をしてくれた。

「……このまま天国で家内に会っても、あいつの好きなものの話の一つもできない」

なるほど。多分この方は、スーパーに一人で買い物に行っても奥様のことを気にして何かお菓子の一つでも気を遣って買ってきてくれるような奥様にお優しい方なのだろう。

そして今度は、すでに亡くなられた奥様に会いに行くのに、奥様の好きだった本の一つも知らない自分がどうにもやるせないと感じたのだろう。だからここへきて、その本のことを知りに来たんだ。

そうと決まれば、私も全身全霊でそのお手伝いをさせていただくだけだ。

「……奥様は、毎日“同じ”本を読まれていたのですか？」

「何十年も毎日欠かさずじゃ」

となると何度も読み返しても問題ない、むしろ読み返すことで面白さが出るような本なのではないかと推察できる。

そんな本のジャンルとしてミステリーがあげられる。

犯人やタネが分かってからもう一度読み返すと気付かなかった伏線や不審点などに気付いてそれはそれで面白い。私もたまにする。

しかし少しの時間とは言え毎日、何十年も一冊の本だけに集中するとは少し考えにくい。

そしておとうさんと同じ年代の方だったら最新のミステリー小説は読まれないだろう。

そして白い表紙。

考えられる本を思い出した。

私は梯子を調節して、一步一步踏みしめて上る。白い背表紙が並んだ箇所、作者の名前を確認してから数冊ほど持って降りる。

「こちらじゃないですかね？」

そうやって手渡したのは、文庫本は文庫本でも、「全集」だった。

光文社から出ている「江戸川乱歩全集」だ。

「おおおおお！ これじゃ！ なぜこれじゃと分かった!？」

おとうさんは興奮した様子でここにきて初めて笑ってくれた。

「こちらの本、全集でして同じような表紙で何冊も出てまして、端から見て一冊の本と勘違いしてもおかしくないと思ったのもありますが……それよりも、ミステリーは何度読み返してもおもしろいですから、毎朝何度も何度も読んでおられてもおかしくないと思ひまして、あとは山カンです」

「そうか……さすが店のもんはようわかっるとる」

うれしそうな声から一変、おとうさんはその全集があった個所の本棚を見上げてため息をつきました。

「しかし、こう何冊もあれば簡単には読み切れん」

たしかに全部はさすがに厳しいだろう。文豪の一生を追うのだから。

しかしわざわざそんなことをすることはしない。

「大丈夫ですよ。一冊、いや一話だけでもいいと思ひます」

「たった一話でか」

「はい。毎日読まれるほど熟読されているのでしたら、一話だけでもお話できるとたのしいと思ひますよ」

「そういうものか？」

「そういうものです」

自分の好きな物語を、好きな人と話せるほどたのしいこともない。

このおとうさんもそのうれしさに気付けばいいなと一古本屋店員として思った。

そうしてお父さんは一冊手に取り、まるで何かを思い出すように表紙をまじまじと見つめ、やわらかい表情を見せました。

「これでやっとな顔向けできる」

そのやわらかい表情は私にも伝播した。

私はスツールを持ってきて、おとうさんに座ってもらう。

「お茶かコーヒー、どうですか？」

「茶を」

「はい」

一度裏に戻り、急須に茶葉を用意し、少し熱めのお湯をゆっくり注ぐ。

もちろん一番茶をおとうさんに差し出す。

「ありがとう」

と、おとうさんは一瞬本から視線を私の方に向けて私にお礼を言った。

お優しい方と分かっていても、強面の方からの優しいお礼の言葉は少し胸に残ります。

お盆を胸の前にやり、邪魔しないように目だけでお礼を返しました。

しばらくすると、おとうさんは静かに息を吐き、光の粒子がおとうさんの周りに舞い始めた。

「そうじゃ」

おとうさんは私の方を見て目を丸くして言う。

「お前はなぜこんなところで独りなんじゃ？」

第三話

ピンポーン

「ハッ！」

今日も今日とて番台で一人、原稿用紙にはペン先を立てずに文庫本を読みふけていたのだが、ふと背後からチャイムが聞こえて私は文庫本を勢いよく閉じ、暖簾の奥へ勢いよく走る。木造の床をドタドタ蹴りながら、裏口の扉を開ける。

「はい！」

そこにいる何かを信じて私は大きな声であいさつをするも、そこには誰もおらずただガムテープで封されたダンボールが置かれているだけだった。

「……またダメか」

私は悔やみながらダンボールを「よっ」と持ち上げる。

店の方で開けてみると中にはたくさんの本がビッシリ詰まっていた。

ここ、日高書店にはこうして本が届く。

生と死の狭間にあるこの古本屋に卸業者や買取り客が来るわけもなく、不定期に裏口のチャイムが鳴り、ダンボールが置かれている。

一体誰があんなところに封じた本の入ったダンボールを置いていくのか、そもそもこの本は一体なんなのか、私は何一つ知らない。

ヘイロウの浮いた天使さんか、トライデントを持った悪魔さんか、どっちにしたって一度は会ってみたいものだ。ここにきてから何度もチャイムが鳴ったらすぐに取りに行くようにしているんだけどまだ一度も誰とも会えていない。

ここにいる時の唯一の業務的な仕事は、こうして不定期に届く本たちをお店の棚に並べることだけです。本をそれぞれジャンルや種類ごとに棚に陳列していく。一時間もあれば終わるような簡単な業務のはずなのだが、本好きの性として、こうして並べている間に、目についた本で道草を食ってしまう。

そんなこんなでたっぷり二時間近くかけて本を全て並べていた。

そんなに動いていないつもりだけど、ほんのり甘いものが食べたくなるような心地いい疲労感があった。

最後の一冊。脚立に足をかけて高いところに本を差し込み、背表紙を指で押した時、ふと人の気配を感じました。

ガラ、ガラガラガラ……とガラス戸の重さにふんばりを利かせながら戸を開ける音と共に、一人の高校生くらいと思われる男性がやってきた。

「こんにちは」

「こ、こんにちは」

私は脚立から下りて、簡単にロングスカートについたほこりを払って声をかけた。高校生くらいの少年はどこか緊張した声色で返事をしてくれた。

少年は二階まで続かんとする本棚に呆気にとられながら、店内を見上げて歩き出した。

「すげえ……」

思わず言葉が漏れ出てしまっている。恥ずかしいだろうから聞こえていないふりをする。

しばらく店内を見回って、時折文庫本を手にしたりしていた少年は何度か私の方を窺うような素振りを見せていました。こちらから声をかけると彼は委縮してしまいそうだったので、あえて彼からの言葉をゆっくり待ちました。

すると覚悟を決めたように少年は「すみません」と私に向かって声をかけてくれた。

「ここって本屋ですよ」

「はい。見ての通り」

「あの、ある本を探してて」

「一緒に探しましょうか？」

「あ、あざっす……でも、その、文庫本とかじゃなくて……」

少年は一層緊張した様子で、まるで何かを恥ずかしむような、委縮した声で続ける。

「その、漫画なんです」

「ほう？」

「ヒ、ヒロアカなんですけど」

「僕のヒーローアカデミアですね」

「そ、そうです！ 見た限り、文庫本とか単行本ばかり

で漫画とか見当たらずで……すみません、そういうお店じゃないですよ」

「……………いや、ありますよ」

「えっ!？」

少し私が間を置いて口を開くと、少年は驚いた声を上げた。そりゃこの古そうな古本屋でそんな新しい漫画があるとは思わないだろう。ただまあ、厳密に言えばお店にはない。

「少し待ってください」

私は番台からお店の方ではなく、暖簾をくぐって裏の方へ行った。そこからは私の居住スペースだ。小さなキッチンを抜け、両手をつきながら急こう配の階段を上り、寝室へ入る。

お店の本棚を見てから見れば小さな本棚から青いjcの文字が書かれた漫画を数冊手に取る。

「こちらですよ」

少年に見せると目をキラキラさせて「そうです!」とうなずいた。

「もしよかったら読んでいってください」

「え、でもこれ私物ですよ？」

確かに私物だ。個人的に、ここに来る前に好きだった本がここに来ると勝手に私物化していた。今のところ誰にも咎められてないし、だいじょぶだいじょぶ。

「あー、まあ、そうですけど、大丈夫ですよ。もちろんあなたが気にしないのだったらですけど」

「ありがたく読ませていただきます!」

少年は大きめに頭を下げると私の私物の漫画を手にとってくれました。

立って読もうとしていたのでスツールを裏から出すと「どうも」と、小さく言って腰掛けてくれました。

「お茶かコーヒー、どっちがいいですか？」

「え、ああ……じゃあ、コーヒーで」

「砂糖とミルクは？」

「い、入れてもらっていいですか？」

「もちろんです」

何も恥ずかしいことなどないのに、どこか照れくさそうに言うものだからなんだかかわいく見えて思わずこちらも

笑みがこぼれる。

店の奥へ行き、すでに挽いてあるコーヒー粉をドリッブする。少年の分の砂糖とミルクを入れたコーヒーを作りながら、なんとなく私にも砂糖とミルクを入れてみた。いつもは断然ブラック派なのだが、たまにはいいだろう。さらに今日はお茶請けに小ぶりなクッキーなんかも準備してみた。今日はそういう気分だ。

「ありがとうございます」

お店の方に戻り、少年のそばに甘いコーヒーとクッキーを差し出すと彼は短くお礼を言ってくれました。私も今日は彼が手に取らなかった昔のヒロアカに手を伸ばしました。

ちらりと彼の方を見ると、小ぶりなクッキーを一口で放り込んでいました。

クッキーを口に含んでいる間、彼は口元を抑えながら食べカスが絶対に本にかからないように食べていた。そこそこ長い時間口に含んで噛んでいたから、一口が小さい子なのかもしれない。

なのに汚すまいと食べてくれたのを見て少しうれしかった。

しばらくすると、鼻をすする音が聞こえた。

「ありがとうございました」

落ち着いた少年は、ヒロアカの漫画本を返しに来てくれた。目許は真っ赤になっていたが、もう十分彼の中で噛みしめられたのだろう。

「これだけが心残りだったんです」

漫画本を受取ると、少年は自分の気持ちを共有するように気持ちに言葉がついていくような話し方で話し始めた。

「中学の頃にハマって、『これ読み切るまで死ねねえな!』なんて友達と笑いあってたんですけど……………俺だけがそれをできずに死んじゃったから」

どこにでもいる漫画好きの少年の思い出話だった。

物語ではありふれたような昔話も、目の前にして聞くと文字だけで読むよりも何倍も心にジンと響いた。

今自分が感じている感動も衝動も、もう友達とは共有できないというのに、彼はすごくいい顔をしていた。

「お手伝いできたのなら、よかったです」

私でよければ意見交換くらいはしたいのだが、そんなことせずとも少年はもう十分といった清々しい顔立ちをしていて何も言えませんでした。

まるで私だけ取り残されているような気分になってしまったのは内緒です。

「あ、そういえば」

光の粒子に包まれた少年は、忘れていたとばかりに私の方を見て尋ねた。

「店主さんは、なんでそんな長い間ここにいらっしゃるんですか？」

第四話

今日も今日とて、文庫本を番台で読みながら時折原稿用紙に目をやっていると、ガラガラッ、とガラス戸が開く音がしました。

「いらっしい」

咄嗟のことで、反射的にそう口にしてしまいました。コンマ遅れて目がガラス戸の方を向いたのですが、そこに立っていた女性はこの二階まで貫かんとするほど本がならんだ店内を見て、少し嫌そうな顔をしていました。

「うわ、本ばっか……」

そう口にしてすぐ、女性は私の存在に気付いたのでしょ。ペコリと申し訳なさそうに頭を下げました。

私はポカンと呆けていました。

ここに来る人達は少なからず何らかの形で本に未練を残した人たちです。そんな人たちの中で、本を見て嫌悪するような人は初めてだったからです。そんな人も来てしまうんだと、なぜだかこちらが悲しくなりました。

三十代後半っぽい女性は本棚をぐるりと睥睨したのち、目の高さのところにある文庫の小説のところまで立ち止まりました。

まるで考え込むように小説を見ていたので、私はせめてと思いつき番台から出て彼女のもとへ静かに向かいました。

「何かお探しですか？」

「えっ、あ、いや……私、本読めないんで」

読めない。読まない、ではなく読めないと彼女は言った。

まるで逃げるようなその口調に、何やら明確な拒絶のようなものを強く感じた。

「……あのっ、もしよかったら簡単なもの見繕いますから、何か読んでみませんか？」

ここに来るってことは何かしら本に関して未練があるということだ。

幸い時間だけはたっぷりある。簡単なものから徐々にゆっくりと本を楽しんでくれればよく思ってくれるかもしれない。

「……いえ、大丈夫です……」

女性は一歩引いた。

「そんなこと言わずに」

「結構です！」

「ッ———!？」

今度はハッキリと大きな声で拒絶されてしまった。

まさかそこまで言われるなんて思ってもみなかったから私は情けなくも固まってしまった。こんな風に怒られたのなんていつぶりだろう。平積みしていた本に私がついていた文庫本を落としてしまった。

怖い顔をしていた女性は、私の顔を見るなりどどん顔色を悪くしながら眉をハの字にしていきました。

「ああ、ごめんなさい！ 私っ」

「だ、大丈夫ですよ！ 私の方こそごめんなさい。無理やり勧められた本を読みたくないのなんて、小学生でもわかる感情ですよ……ごめんなさい」

読書感想文の宿題とかで無理やり指定図書を読まされて本に苦手意識を抱く子は多い。

私も感覚としては分かっていたはずなのに、今こうして本で人を不快にしてしまった。

本を人の手に取ってもらう仕事を担っている者として恥ずべき行為だ。

「ここ、本しかない場所ですけど、ゆっくりしてってくださいね」

私はせめて刺激しないようにと、そうにんまり笑って番台に戻った。

そして逃げるように、また文庫本の世界にもぐりこんだ。

「あの、さっきはすみませんでした」

しばらくすると、女性の方から私に声をかけてきてくれた。

「いえ、あれは私もダメでした……」

私も同様に反省する。あんなこと、もう二度と起こしちゃだめだと、そう何度も胸に刻む。

「……あの、もしよかったら、店主さんの好きな本を何冊か見繕ってくれないか？」

「え？」

「リハビリしたいんです」

「リハビリですか……？」

「はい……私、色々あってもう自分がどんな本を好きだったかとかも、忘れちゃって」

それは私にはわからない感覚だった。ただだからこそ、彼女のリハビリしたいという気持ちには応えたいと思った。

「おまかせください」

私は番台から出て店内を見回る。

はじめは小説の方がいいだろう。それで、できるだけ読みやすいもの。そして分かりやすいもの、でもって面白いものの……そう聞くと難しいけれど日本の本はすごいもので今バツと本棚を見ただけで何冊かにすらすら手が伸びる。

『あ』

なんて探していると、私が過去にキャラに感情移入し、明確に好きだった本を見つけた。久しぶりに背表紙をみつけて思わず手にとってしまった。これもいいかもしれない。

「お待たせしました」

私は色々と厳選して、五冊の本を女性にお渡しした。

なんだか自分のセンスを問われているような気がして、すごく緊張した。

「ありがとうございます………あ、これは読んだことある」

表紙とあらすじを一冊一冊目で追いながら、三冊目でそんなことを口にした。

「………あはは、おもしろそう……」

はじめて彼女は笑顔を見せた。

しかし、最後の一冊でストンとその笑顔が消えた。

「えっ……」

女性は五冊目の本を手にして固まった。

「あの、この本」

それは私が昔明確に好きだった本でした。

「あ、この本は完全に私の趣味で好きな本なんです。私こ

の人のデビューから好きでして、ずっと読んでたんですけど、最後に出たこの作品がとくに大好きなんです。登場人物の心情が丁寧に書かれてて、それでいてリアルで、読んでて気持ちよかったです。でも、これの下巻がなかなか出版されなくて………」

なんて饒舌に自分の感想ばかり話してしまって、思わずハッと女性の顔を窺った。

私はバカか！ ついさっき自分の気持ちだけで先行しないで誓ったばかりじゃないか！ せっかく読もうとしてくれている人にそんな風に詰め寄っちゃダメじゃないか！

「すみません！ 私、また」

「いいんです！ えっと、あの……」

女性は私の方を見て、言葉を詰まらせる。

「あの……これ、私の本、なん、ですっ……」

つまらせた先に出てきた言葉はにわかには信じがたい言葉だった。「私の本」というのが仮に「私が書いた本」という意味なら、目の前にいるこの女性は

「え、じゃあ」

「はい。私、元作家の者でして……」

どこか申し訳なさそうに作家さんの女性は目をそらしながらそう言った。

元作家先生の女性の方に私は煎茶を用意し、スツールに座ってもらいました。

私もその隣に腰掛けて自分の分の煎茶を啜り、作家さんが話しやすい状況を作りました。

「……丁度その本でした。ご存じかもしれませんがものすごく酷評だったんです」

「あ……」

言われればそうだった気がする。心無い酷評に楽しかった本の記憶を塗り替えられるのが嫌ですぐに感想や評判を調べるのをやめてしまっていて、すっかり忘れていた。

「ただ酷評されるだけなら仕方ないんです。現に力不足を

痛感した作品ではありますし……でも、いつしか盗作を疑われて、ついには私自身の誹謗中傷にまで発展して」

そこまでとは知らなかった。本の売り上げにも関わらず、出版社がその手の情報に緘口令でも出したのかもしれない。

「それで書くのが怖くなって、いつの間にか書き方も忘れちゃって、思い出そうと昔の自分の作品や他の先生方の作品を読んだりしたんですけど、徐々に読むことも難しくなって、気が付いたら本にもキーボードにも手が伸びなくなって……」

作家さんの持つ湯呑が少し揺れ始めて、私はそっと手を添えた。

「……っ」

彼女に手を添えた瞬間、彼女の首元に縄のような痣が見えてしまった。これだけで辛い死因が分かかってしまって、血の気が引く思いだった。

「……でも、最後にいい感想が聞けました」

それまで真っ青だった作家さんの表情に徐々に血の気が戻っていた。

「好きなんて言ってくれて、うれしかったです」

「ダメです……遅いですよ」

こんなところで私なんかの感想を聞いて満足なんてしないでほしい。

作家さんに沿えた手から光の粒子がポツポツと出てくる。

言葉以上に作家さんが満足した証拠だ。

「こんなの、こんなのってないですよッ！」

「ありがとうございます。私のために、いや、私の代わりにそこまで怒ってくれて」

私が怒れば怒るほど、作家さんは笑顔になっていく。

作家さん自身も怒っていたはずだ。自分が盗作を疑われて、罵られて、自殺するほど追い込まれるような世界を。だけど彼女は怒り方を知らなかったんだ。

作家さんは手元にあった自分の本を手取る。

「よく出版できたものです。一体何人の作家志望の人が日本にいるか」

「それを勝ち取っても、最期がこんなじゃ意味ない！」

「そんなことないんです。私は、私が生きた証を紙に残せたのがうれしい」

「そんなのっ！」

「あなただってこの気持ちは分かるはずですよ」

私の言葉を遮って、作家さんは私の方を見上げた。

目の合った作家さんは本当に優しい丸い目をしていて。そしてその目は私ではなく、私の奥にある番台に向いた。

「あちらの原稿用紙、拝見しても？」

「えっ？ あ、あれはそういうんじゃない……」

番台に置いてある原稿用紙、たしかにそこには私の書いた文字がびっしり詰まっている。裏にはもっとたくさんあるが、あれはそういうんじゃない。

「あれは……日誌なんです」

「日誌？」

「はい。ここにきたお客さんのお話を、書いてるんです」

なぜ書き始めたかは私でも分からない。そこに原稿用紙とペンがあったからとしか言えないのだけれど、一度書いてみるといつの間にか日課ようになっていた。

「じゃああれは店主さんの書いた「小説」なんですね」

「ッ……!？」

毎日小説を読みふけて、一度だって書いてみたいと思わなかったわけじゃない。

でも改めて「小説」と言われて初めて気が付いた。あの原稿用紙は、私が書き連ねていた「日誌」は、「小説」だったんだ。

あの日誌を書くという行為は、すんなりと私の日常に馴染んでいた。

まるで昔からこうしていたように。

「読ませてもらっても？」

「え!? そんな、作家さんに読ませるようなものじゃ」

「作家だって人ですよ。むしろ読書欲は人一倍ですよ？」

作家さんは笑顔とは違う、ワクワクした好奇心に満ちた顔をしている。

「大丈夫です。こんな私です。講評なんてしません」

そう言う問題じゃない。

恥かしさとか、もどかしさとか困惑とか、色々あったけれど、物語を書いた人間にとって読みたいと言ってくれてい

る人を拒む理由にはなりえない。

「……そういや、これタイトルとかあるんですか？」

「え、タイトルですか？ いや、そこそこ書いてから決めようかと思ってまだ決めてないです」

「うーん、さっき日誌って言いましたよね？ じゃあ「日高書店経営日誌」ですね！ って、安直すぎですかね」

なんて冗談めかして笑うこの人の書く本は本当に愚直なほど真っ直ぐなお話だった。

「いえ、憧れの作家さんから頂いたタイトル、大事にしますよ」

断る理由なんてなかった。

それから作家さんは私の小説、『日高書店経営日誌』を読んでもらった。そっと邪魔しないようにお茶のおかわりを注いで、私も作家さんの書いた本を読む。

しかしいつも以上に集中できない。

隣にいる人が私の小説を読んでもらうと思うと、一体どんな風に思われているのか、嫌な気持ちになっていないか、面白く感じてくれているか、誤字脱字はなかったか、色々考えてしまって気が気でなかった。

「…………『身体から光の粒子のようなものがぼつぼつと湧いてきました』って……あ」

作家さんはふと、復唱するように私の文を口に出しました。

「これ、そう言う意味か」

自分の拳を何度か握って、自分の身体からぼつぼつと湧き出る光の粒子を見る。

「みなさん、その光に包まれていなくなっちゃいます」

「……あの、あなたは？」

「え」

「日高さんは、なんでここにいらっしゃるんですか？」

それは自身の心に余裕が出来て、成仏されるほとんどの方から投げかけられる質問だった。

「……それは……私も分からないんです」

「わからない？」

「はい。いつからここにいるのか、なんでこんなところにいるのか、何も分からないんです」

もうずいぶん長い間ここにいるような気がするが、実際どれだけいたかは覚えていない。少なくともこの原稿用紙分はたしかだが、それ以上は青天井だ。

「私たちと同じだと思ってたんですけど」

「じゃあ私も本に何か未練があるのかもしれない……詳細は全く分かりませんが」

「……いや、案外分かるかもしれませんよ」

作家さんの言葉に私は首をかしげます。ふっと微笑む作家さんと目があうと、視界の端から光の粒子がふわふわ舞ってきました。

「えっ！ うそ、なんで」

その光の粒子は間違いなく私から舞って出たものでした。

光の粒子が出たってことは私も成仏するってことだ。

本への未練を断ち切れたということになる。自分が何に未練を残していたのかも分かっていないのに、未練が無くなるなんて妙な話だ。

私は情けなく、縋るように同じように光の粒子に包まれそうな作家さんに目を向ける。

すると一つの可能性を思いついた。

「…………私、自分の書いた作品を読んでほしかったんだ」

もしそうだとすると作家さんに私の小説を読んでもらったうえで成仏しそうになっていることにも、ここにきてずっと本を読むだけじゃ成仏できなかったことにも、私が原稿用紙に向かい続けられたのにも、合点が行く。

そして何より他ならぬ私自身が、作家さんに小説を読んでもらったことをすごくうれしく思っていることが一番の証拠だ。

人に読んでもらうって、こんなにこそばゆくて心地いいものなんだと初めて知った。

「きっと、日高さんの前世は物書きだったんですね」

「……そうかも、しれませんね。きっと成熟せずに死んじゃったんでしょう」

私はハハッと乾いた笑みをこぼした。

素人にしてはそこそこになっているとは思いますが、そんなのあくまでも自意識だ。目の前にいる読者の方がどう思っているかが全てだ。

「あの、これ」

勇気を振り絞り感想を聞き出そうとしたのだが、すでに目の前には誰もいなかった。残滓のような光の粒子が完全に消え入り、作家さんはもうそこにはいなくなって無事に成仏していた。

「……」

これまでも誰かが成仏していつもの静かな部屋に戻ったことは何度もあったけれど、そのどれよりも虚無感が大きく、しばらく茫然と立ち尽くしていた。

作家さんはいそ感想は教えてくれなかった。

それだけつまらない話だったか、まだ判断できるほど読めていなかったか、どちらにしても後味は悪い結果に収まってしまった。

だけどそれでもよかった。誰かが自分の話を読んでくれた。それだけで救われる人だっている。

こんな時、救ってくれた人に、小説を読んでもくれた人に、なんと言えればいいか私は知っている。私の目の前にはもういないけれど、まだここまで読んでくれている人のために——

「読んでくれて、ありがとうございました」

2024年10月7日

講演会報告

講演会報告

Lecture Reports



認識の余剰

杉原 康太

『羽下大信氏講演会 私の聴き方、あなたの聴き方ー音楽素材を使ってー』の講演会を拝聴し、私が一番に感じた事はタイトルにもあるように「認識の余剰」の重要性です。

私は普段大学で、制作系の研究室に所属しており、鑑賞者に対して対象物がどのように認識されるかという事を考え、対象物に操作を加え、制作しています。そうした中で、私は対象物の余剰をメインテーマに制作しており、本講演会の内容も一致する点があると感じました。

本講演会では様々な音楽が紹介され、デザイン工学部建築・環境デザイン学科笹岡研究室の学生が登壇し、幾つかの項目に従って感想を各々述べるという方法で進行されました。項目を大まかに述べると、どの音に着目しているか、それに伴った情景はどういったものが浮かんでくるか、影響される身体感覚はあるか、その音楽はどちらかといえば好きか嫌いかというものでした。紹介された音楽は幅広く、人が歌い歌詞があるものもあれば、楽器だけで演奏されているものもありました。そうして紹介された音楽に対して各々が項目に従って感想を述べていると、ある奇妙な体験に遭遇しました。それというのは、各々が聞いている音楽に対して注目している音や情景が異なるというものです。一見すると当たり前的事かと思いき



が、私は現代社会において、こうした鑑賞者とメディアの関係は重要な事だと思います。

少し私の制作と研究の話にもなりますが、現代の情報社会において、大量の情報を次から次へと消費する事に鑑賞者は慣れ、目の前の情報を簡単にパッケージ化し圧縮してしまう傾向にあるのではないかと考えています。SNSの発展に伴って「いいね」などの他者との共感性や承認性を自ずと求めてしまい、他者との意見の一致が求められやすい環境に陥っていると思います。さらに鑑賞者だけでなく、対象物の方にも話を広げると、モダニズム以降（特に建築では）、生産性・普遍性の旗の下に対象物の形態と機能の一致が求められるようになり、鑑賞者は他の鑑賞者と流動的に溶け合うようになってしまったのではないかと考えています。そうした時代背景の中で、私は鑑賞者の消費行為に対して抵抗する必要があるのではないかと考えています。都市と建築の話をする時、先ほども述べたように、生産性・普遍性によって特に都市部ではオフィスビル群が連なり、どの都市に行っても同じような街並みが見られます。しかし、そうした現象の問題として、都市部で活動する人々のストレス値が急増しているという問題が様々な記事や論考で見られます。この話については建築家トーマス・ヘザウィックのTEDの講演会『退屈な建築の台頭と、人間味あふれる建築の事例』の中で述べられています。私もこの都市と建築の捉え方には共感しており、こうした問題は建築と都市のみにとどまらず様々な分野でも見られると思います。そこで、私は、こうした情報社会の中では却って、一人一人の感じ方が異なるという事を創出する事が需要なのではないかと考えています。私が制作者という事もありますが、メディアに対して「余剰」が必要だと考えています。現代以降のメディアの形態と機能の癒着を乖離させる事によって、鑑賞者の承認的共感性を打破する事ができるのではないかと考えています。この操作による「余剰」は現代における大量の情報により補強され、意味があるように見える・何かを想起させる性質(meaningfulness)を創出し、鑑賞者一人一

人の経験の違いから違った観点を促せるのではないかと考えています。

羽下大信さんの本講演会では有形ではなく無形という形式ではありますが、そうした「認識の余剰」を垣間見る事ができたのではないかと思います。心理や精神の話な

ので断言的な話はないですが、他者と同じであったり、はたまた全く異なったりと、そうした事を鑑賞者に対して創出している羽下大信さんは現代社会において大切な事を気づかせてくれたのではないかと思います。

(工学研究科環境デザイン専攻 博士前期課程)



▲令和6年度 写真・イラストコンテスト(イラストデザイン部門)奨励賞作品
『いつかの思い出』
神崎 峻(デザイン工学部 建築・環境デザイン学科)

留学記



留学記

Study Abroad Reports

令和6年度 写真・イラストコンテスト(写真部門)応募作品
『晩秋、竜王溪を往く。』
中 朝陽(工学部 交通機械工学科)

カナダ留学レポート

デザイン工学部 建築環境デザイン学科 和泉 陽

留学先：

カナダ バンクーバー
ランガラ大学

留学期間：

2023/8/29 ~ 2024/3/4



留学の経緯

中学生の頃から、常に海外に対しての憧れがあり、大学生になったら必ず留学をしようと考えていました。しかし、大学入学と同時に新型コロナウイルスの影響で、留学どころか通常のキャンパスライフすらも送ることが困難な日々を2年半ほど過ごして来ました。そんな中、3年生の後半に入り、待ちに待った海外留学のチャンスがやって来ました。ですが、建築学生にとって4年生はとても大切な研究の1年であり、3年生から4年生に上がるのに1年のブランクができることへの不安や、3年間一緒に大学生活を共にしてきた仲間たちと一緒に卒業できないことへの寂しさがありました。それでも、留学は私にとって子供の頃からの夢であり、悩みを相談すると背中を押してくれる友達や、先生、職場の仲間たちのおかげで、留学を決断することができました。

留学準備

まず、大学が募集している枠に入るのに、学習計画や推薦状の依頼、作文、面接などの準備がいりました。特に私は建築学生であり、3年間はほとんど英語に触れていなかったため、面接時の英語での質問はとても緊張したのを覚えています。面接終了後は、研究の関係で半年間大学を休学したため、時間はたくさんありました。しかし、ビザの取得や、カナダの大学の入学前のテスト、アパートの手続きなど、どれも時間がかかりかかったので正直大変でした。中でも特に大変だったのは、留学費用問題です。私は留学のための奨学金を借りたかったのですが、いろいろな事情で借りることができず、親にも大学のことに

関するお金の援助はしてもらえないと入学時から言われていたので、半年間はほぼ毎日アルバイトの日々でした。それでも渡航が近づくにつれ、だんだんと実感が湧いてきて、毎日頑張ることができました。出発前の一週間には、たくさんの人が「これ持っていき!」とお味噌汁やお米や日本の文房具などカナダの生活に役立つものをたくさん持たせてくれました。出国の当日は大好きな幼馴染と親友たちがお見送りに来てくれて、より頑張ろうという気持ちになりました。

大学・学外の生活

私が通う大学、ランガラカレッジのLEAPコースでは、母国語を英語としない国の人々がカナダの大学入学のためにアカデミックの英語を学びます。主にリーディング、ライティング、リスニングにフォーカスして授業を進行し、もちろん授業中先生たちは全て英語で授業を行います。初めの方はやはり、耳が英語に慣れていないので、理解するのが大変なこともたくさんありましたが、授業中の話し合いの時間や、学外でクラスメイトとの時間をできるだけたくさん作ることで、スムーズに英語に慣れることができました。

学外では、授業終わりに友達と遊んだり、ご飯を食べに行ったり、私はホームステイではなかったので、自炊するのが楽しかったです。特にカナダに着いて初めの頃は、スーパーに行くと日本にはない商品がたくさんあって、ご飯メニューを考えるのにウキウキしていました。日本食が食べたくないと、T&Tという近所にあるアジアスーパーで、ほとんどのものを手に入れることができたので、正直日本食が恋しくなることはあまりなかったです。(もちろん目が飛び出るほど値段は高いですが…)

私はルームシェアだったので、常にルームメイトが2人いました。初めの3ヶ月はフィリピン人とカナダ人でした。この2人は今回の留学生活において本当に大きな出会いだったと思います。毎日私の拙い英語を必死に理解してくれ、喋る時は私が理解しやすいようにゆっくり喋ってくれ、

できるだけ簡単な英語で話しかけてくれました。3人は本当に仲が良く、週末になるとお出かけに行ったり、夜にガールズトークをしたり、お互いの国の文化を教えあったり、何か悩み事があると相談に乗ってくれたり。この2人なしでは私の留学生活は退屈なものになっていたと言っても過言ではないほど大きな存在でした。

この留学生活でもうひとつ大きかったのが、剣道です。私は中学生の頃から剣道をしていて、カナダでもできればいいなと思っていました。そこでUBCの剣道チームを見つけ、稽古に参加させてもらうことになりました。週に2回の稽古でしたが、みんな私のことを快く受け入れてくれて、楽しいカナダでの剣道ライフを送ることができました。その中でも、1番の思い出はアメリカでの試合に団体戦で優勝することができたことです。

最後に

半年間の留学は本当にあっという間でした。楽しかったことはたくさんありますが、もちろん苦労したこともありましたが、どれも自分にとってはいい思い出であり、いい人生の財産になったと思います。この留学で学んだことは、何事も一度行動してみるということです。何かを頑張ろうとしている人、頑張っている人はすごく輝いていて、その姿に他の誰かも勇気をもらったり、サポートしてあげたいと思ったり、自分にたくさんのいい影響があることを知りました。これからの自分の人生にこの留学生活は大きないい影響を与えてくれたと思います。全ての出会い・出来事に感謝です。



多くを得た韓国留学

経営学部 経営学科 西岡 楓果

今回私が韓国留学に行くことを決意したきっかけは、大学四年間の間に何か大きなことに挑戦したいと考えていたからです。大学に入学してから留学に行くまでの大学生活は、授業にアルバイトに代わり映えのしない毎日でした。中学生の頃、韓国ドラマをきっかけに韓国に興味を持ちはじめ、韓国語や文化について学びたいと考えていました。韓国語は独学で勉強をしていたものの日本で韓国人と直接会話し交流するには限界があり、実際に韓国に行き学ぶことに決めました。

留学先では、語学勉強の他にも韓国人学生との交流だけでなく、様々な国籍の仲間たちとの交流が私にとって大きな魅力となり、新鮮な環境となりました。言語の壁を越え、韓国語を学ぶ喜びを共有する中で、異なる文化背景を持つ学生たちとのコミュニケーションが豊かな学びの場となりました。勉強中の韓国語を駆使して日常会話を楽しむ一方で、英語が通じない場面ではジェスチャーや表現力を使ってコミュニケーションを深めました。これらの経験は、言語学習において適応能力と創造性を養う機会となり、再び新たな言語学習の挑戦への意欲を高めることとなりました。

特に印象深いのは、外国語スピーチ大会での韓国語部門での入賞経験です。私は専攻しているファッションビ

ジネスについてスピーチしたのですが、異なる言語でのスピーチを通じて韓国語で表現し理解してもらえるよう文章を考える難しさ、自らの思いや考えを伝える難しさ喜びを知りました。人前で、しかも海外という場でこういった経験は初めてだったため緊張もしましたが、その時出来るレベルがどの程度なのかを知るためにも挑戦しようと思いました。他にも様々な国籍の学生がこの大会に出て母国語とは違う言語でスピーチをしており、それぞれの国の表現方法や言語だけではなく考え方などさまざまな思いに感銘を受けました。この経験は、留学先での努力の成果として、自信を深めると同時に、異文化におけるコミュニケーションスキルの向上にも繋がりました。

さらに、学生会や日本語学科が主催する学術文化祭の演劇の日本語練習の場に参加させて頂き、日本語を勉強しながら演劇をする学生たちとの交流を深めました。日本語を教える中で、日本にいれば考えないような日本語に対する気付きがありました。文化の共有を通じて友情を築くことができ、本番の演劇を鑑賞した時は携わる事ができた分、その他の人よりも熱い思いと感動するものがありました。こういった文化を体験することで留学生活がより豊かなものになりました。

そしてサークルを通じて韓国人の先輩方と知り合い、



日韓のコミュニティサイトの開発に携わることが出来ました。語学勉強の向上だけでなくその他のスキルアップにも繋がり、自分自身が留学で経験したことを基に日韓の大学生がより良いコミュニケーションをとれるようなサイトの開発を現在も続けて活動しています。留学を通じて様々な国籍の学生たちとの交流を重ねる中で、韓国の文化に触れる機会も多く得られました。伝統的な行事や食事、観光地巡りなどを通じて、韓国の歴史や習慣に深く理解し国際的な視野を広げることができました。

何よりもこれまで大学のイベントや授業以外の活動には消極的だった私がこんなにも色々なことに参加し、積極的にさまざまな活動に関わりを持つようになったのもこの留学があったからです。

ハンバット大学在学学生の方々のサポート、留学生同士

助け合い国境を越えた人と人との繋がりと絆を実感すると共に、自分自身を大きく成長させてくれ心豊かに過ごせたこの貴重な体験を大切にしたいと思います。

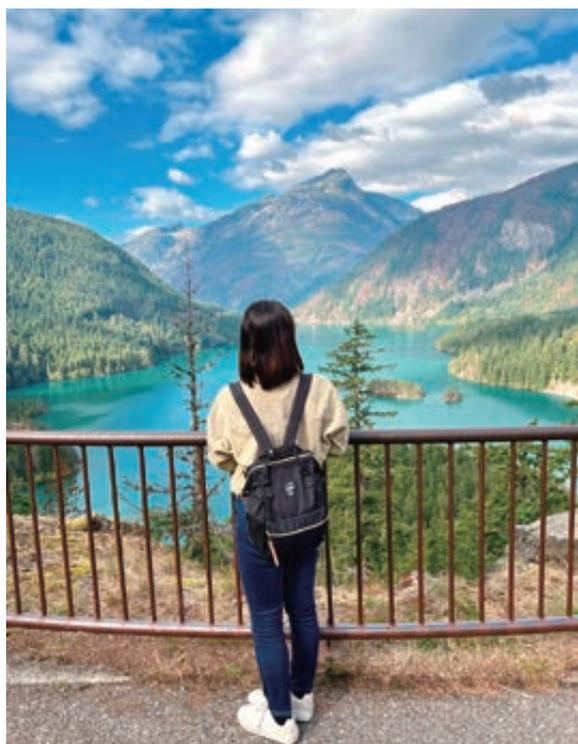
最終的に、この留学体験を通して私は韓国語のスキルの向上だけでなく、異文化コミュニケーションの重要性を実感しました。今までの大学生活の中で最も大きな挑戦となった留学は、言語や文化の違いに立ち向かいながらも、多くの学びと成長そして自信をもたらしてくれました。これからも異なる環境での挑戦を恐れず、今後の人生においてこの体験を活かし新たな経験を積み重ねていきたいと思っています。

最後にこの留学に携わってくださった全ての方々に感謝申し上げます。

アメリカ6ヶ月留学を終えて

国際学部 国際学科 川村 葵

私はアメリカに6ヶ月間留学して学んだ事や経験した事が3つあります。1つ目は、日本とアメリカの違いです。日本では家の玄関に入ってすぐに靴を脱ぎますが、アメリカでは脱ぐ場合もあれば靴を履いたまま生活する場合もあるという事。アメリカのシャワールームは日本のように湯船に浸かる習慣がない事。アメリカのレストランは量が多いので食べきれずお持ち帰りする人が多いですが、日本では残ったおかずをお持ち帰る事はあまり見かけません。そして私がアメリカに来て驚き、面白いなと思ったところはラーメンをお持ち帰りしている人がいて驚きました。最後に日本はまだペット入店禁止の場所が多いですが、アメリカのほとんどのお店やレストランはペットも入店出来るという事です。最初アメリカに来て、靴を脱がない生活になれず、私のベツルームだけ靴を脱いで



生活するようにしました。お風呂に入る時間も寮にはバスタブがなかったので、寒い日は夕方に入り、日によってお風呂に入る時間を考えていました。そして私は日本で、ペットを飼っていませんが、ペットを飼っている家庭はお買い物へ行く時ペットを家に置いて出かけますが、アメリカではペットと一緒にお店に入りお買い物をします。その光景を見た時にアメリカは自由だなと思いました。2つ目は、ルームメイトや学校生活です。私は9月から12月の3ヶ月間はメキシコ人、ベトナム人、アメリカ人、私の4人部屋でした。メキシコ人が車を持っていたのでルームメイトとハイキングに行ったり、朝ごはんを食べに行ったり、スーパーなどたくさんところに連れて行ってくれました。1月から3月は2人のベトナム人、アメリカ人、私の4人になり、ベトナム人と韓国のドラマやアイドルの趣味が合い一緒に歌ったり踊ったり、ルームメイトと一緒に日本食を作ったり、ベトナム料理を作ってくれたり、とても毎日が楽しかったです。学校生活では、授業で英語の文法の基礎を教えてくれる授業があり単語や文の繋げ方がわからない場合先生がわかるまで教えてくれ、間違いがあればその場で教えてくれました。ある授業では、記事を見つけ読み、自分なりの言葉でまとめ、その記事についてクラスメイトに話します。そしてクラスメイトの記事も聞き質問に答えます。このように新しい言葉を使い、文の構成や話すスピードなど4つのスキルを一つの授業で身につける授業もあり、最初はこの授業を受けた時は要約するのも自分なりの言葉で話すのもクラスメイトの記事を聞き取ることも出来なかったですが、最後に近づくに連れて自分でもなんとなく理解出来たと思えるようになりました。3つ目は、イベントです。私は沢山の他国の人とコミュニケーションをとりたいと思い留学に来ました。そして学校のインターナショナルスチューデント用の日帰り旅行があり、シアトルやアイ



ランド、ハイキングなどイベントに参加し、初めて会った人や少しだけ喋ったことがある人とももっと深くまで話す機会が出来プライベートでも遊ぶようになり、その友達とバンクーバーのクリスマスマーケットに行ったり休日にご飯



を食べに行ったりしました。その友達は韓国人で大阪が好きな人で私も韓国に行くのが好きなので、お互いが母国に帰った時日本か韓国で遊ぼうと約束しました。帰ってからの楽しみも増えました。水曜日の放課後に開催される小さなイベントにも参加し、マグカップやスノードームなどを作り日本に持って帰れるお土産が出来ました。学校で開催されるバスケットボールやバレーボール、サッカーの試合をルームメイトやクラスメイト、友達と観に行き知らない人とも仲良く声を合わせて応援をしました。初めて試合を見に行き次もまた見に行きたいという気持ちになりました。他国の人とたくさんコミュニケーションを取る機会がたくさんあり留学に来て良かったと思いました。6ヶ月留学のこれらの経験から英語だけではなく、他国の言語、料理、文化を学ぶことが出来ました。



自分の現在地

国際学部 国際学科 柴田 慶汰

米国ワッコム・コミュニティ・カレッジ留学

私は米国で約6カ月の留学を経験しました。留学先を選択する際、米国を選んだ理由は少しのアメリカ英語への興味だけで後は“なんとなく”でした。今の時代、SNSで世界中の様子を見ることができます。留学前の私のアメリカ留学へのイメージは放課後にビーチに行ったり、パーティーをしたり、スポーツ観戦、そのようなイメージでした。しかし、実際に私が滞在したワシントン州ベリンハムは自然豊かな小さな町でした。そして学校のレベルも私が経験したことのあった他国のものとは違い英語を学びに来る学生は全学生のほんの一部でした。物価や円安の影響も重なり気軽に遊びにも行けず、周りの英語レベルに圧倒されるような留学の始まりでした。自室にいる時間がほとんど、授業にもついていけない、何のために留学に来たのだらう、そんなことを考えてしまうこともありました。

日本にいたとき自分は自分に自信がありました。高校野球で周りの同級生よりつらい思いをしたが成長できた、アルバイトもリーダーを任せただけのほど信頼された、大学の成績も一桁に入れた、他人よりも強い人間になれたと思っていました。しかしこの国に来てから自分の非力さを知ることができました。自分を信頼してくださっている人たちの中で楽な道を選んで生活していただけだったことに気づきました。米国という国は日本と違い、英語を話せない人にあまり優しくはありません。他国の自分より年齢が下の学生に笑われたり、宿題の意味が理解できず提



出できなかったり、悔しい思いしかありませんでした。しかし、絶対に諦めませんでした。英語力が低すぎて友達もできない、自室にいる時間が多い、ならば誰よりも勉強してやるうと思いました。中学文法からの見直し、毎日二時間の英語字幕洋画鑑賞、私の英語力は目に見えて成長していきました。すると2カ月頃から英語での会話が楽しくなり、授業の内容を理解し、発言できるようになりました。その頃から友達も多くなり、外出したり、スポーツ、ゲームをしたりと少しずつ充実してきました。

英語を学びに来ているほかの学生たちも初めは英語で会話することへの恐怖心があったと話していました。英語学習の一番の敵は恐怖心です。今振り返ってみると私の中に不要なプライドがあったのだと思います。日本での生活、人間関係が充実していただけに、友達も勝手にできるだろうと思っていました。自分に自信があっただけに、ネイティブ、ネイティブレベルの学生たちに全くついていけない自分を認めたくなかったのだと思います。しかし、この留学では一人の時間、自分と向き合える時間が多くありました。高校野球を引退してから自分の気づかないうちに楽な道を選んでいる自分、自分は他の人よりしんどい思いをしてきたという根拠のない自信を持った自分、学内で最低レベルな自分の英語力、仲のいい人とだけコミュニケーションをとってきた自分、自分の魅力も含めて他にも多くの自分の現在地を見つけました。

選択する地域によって留學生活、得られるものは大きく変わると思います。

私はベリンハムを選んで正解でした。確かに、多くの人が想像するようないわゆるキラキラした夢のアメリカ生活、ではないかもしれませんが。しかし、語学学習においてはネイティブレベルの学生たちが多く在籍しており、町にアジア人に向けたスーパーマーケットがあることや、バスでシアトルやカナダのバンクーバーに行けることなど、何不自由ない生活を送ることができます。アメリカなのでとても安全ということもないですが、小さな町なのでネイティブの学生たちの人柄も大変良く、寮もできたばかりでセ

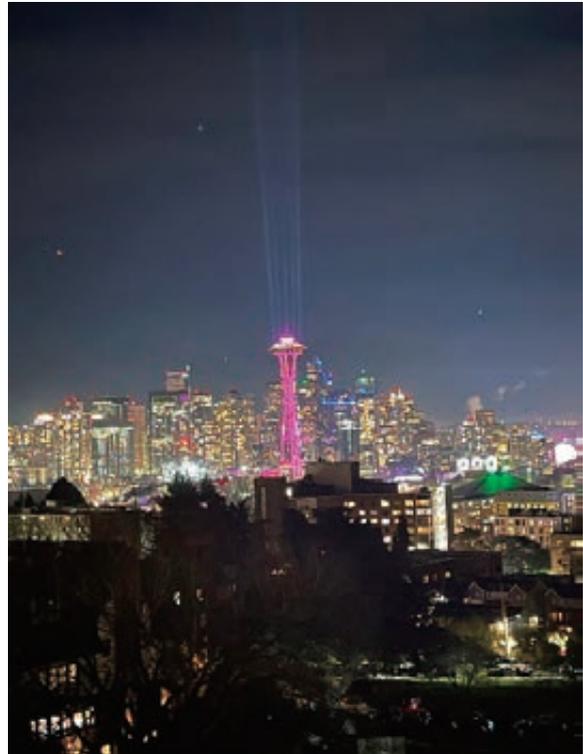
キュリティ、治安は優れています。

この文章は帰国前に書いているので、本当に成長できたかどうかは帰国してから答え合わせができると考えています。しかしほかの学生から、まだまだただ来た時より英語力が成長したと言ってもらえたり、英語字幕のみで洋画が見られるようになったり、実際にTOEICのスコアが150点ほど上がったりと、確かな英語力の向上、そして自分の能力、現在地を知れたことで新たな目標、自分がしなければならないことが明確になりました。

他の国の学生たちと密接に関われたことにより、自分、そして日本がいかに裕福で贅沢なのか、ハングリー精神を忘れてはならないことを思い出しました。

ペリンハムを去ることは少し寂しいですが、新しく成長した自分を早く日本で試したい思いが強いです。

自分という人間を知り、悔しさから成長できた、20歳の節目で一度立ち止まり自分の現在地を見直せた留学になりました。



米国留学を終えて

国際学部 国際学科 三原 新元

私は、昨年9月から今年の3月までの半年間、米国留学を経験しました。私たちは、カナダとアメリカのどちらかを選ぶことができました。その中で、私が米国を選んだ理由は、自分の親戚が住んでいる、ニューヨーク等の大都市に行ってみたいという好奇心から最初は、アメリカを選択しました。私は、昨年の3月に3週間のオーストラリアでの留学も経験していました。そして私は、そこでオーストラリア英語の発音を学んだ経験がありました。さらに、大阪産業大学では、音声学の授業を履修していたこともあり、本場のアメリカ英語と比べてみたいという思いもありました。

そして私は米国にてコミュニティカレッジに留学しました。この経験は、非常に貴重な留学機会をより豊かなものに助長させるものでした。なぜなら、コミュニティカレッジというのは、単なる語学学校と異なり、現地のネイティブのアメリカ人や、自分の専攻をより専門的に学ぶ留学生がほとんどであり、私のように、英語を専門として学ぶ学生は少ない割合でした。

その中で、私はこの米国留学を通して様々な経験と将来のことを考えるきっかけもつけることができました。まず、初めに私が経験した出来事として、学生寮に滞在するという経験でした。私のルームメイトはアメリカ人が2人とインドネシア人が1人と私の計4人での共同生活です。学生寮での滞在となると、ルームメイトとの価値観を共有しあうことが重要です。そして、その中でも宗教の違いを大きく実感する機会になりました。私以外のルームメイトは、イスラム教とキリスト教に入っているとのことでした。そして、ある時期はお祈りや、食べられる料理の違いや断食といった習慣も行っていました。このような宗教の違いを理解することの大切さを学びました。

加えて、授業面でも日本と米国の違いを実感する機会がありました。日本の大学とは違う授業方式でした。まず席の配置から異なり、そして積極的に発言する学生が、日本に比べて格段に多いと感じました。日本の学校では、教員が投げかけた質問に対して、生徒を指名しながら答えていく方式が多いと思います。しかし、米国では、

生徒同士、もしくは、生徒がその場で教員に質問をしながら、積極的に発言していくことが多くありました。そして、私はこの半年間で、英語学習者のための授業だけではなく、コミュニティカレッジの正規科目である、Public Speakingという科を履修することができました。この経験は私にとって非常に有益な経験でした。なぜなら、これは9割がネイティブスピーカーとの対話の授業だからです。さらには、自分で選んだトピックについてプレゼンテーションをする機会が3回ありました。自分で原稿を作り、パワーポイントなどの視覚補助を用いながら、聴衆を説得するという、コンセプトのもと行いました。英語でのプレゼンテーションは、初めてで発音にも不安がありました。しかし、周りのネイティブスピーカーたちが、私が納得するまで説明してくれ、教授の手厚いサポートのおかげで楽しみながら授業を受けることができました。そのため、英語学習者のための授業ではなく、実際にネイティブスピーカーが日常的に使う会話表現を学ぶことができました。

そして勉強だけではなく、様々な他業経験もたくさんできました。学生寮に滞在したおかげで、様々な国籍の友人を持つことができました。その友人たちと、シアトルやハイキングに行ったり、サッカーをしたり、スポーツ観戦を楽しむことができました。

特に、私が留学した、ワッコムコミュニティカレッジではスポーツも盛んで、週に1度は学内で試合を行ってしま

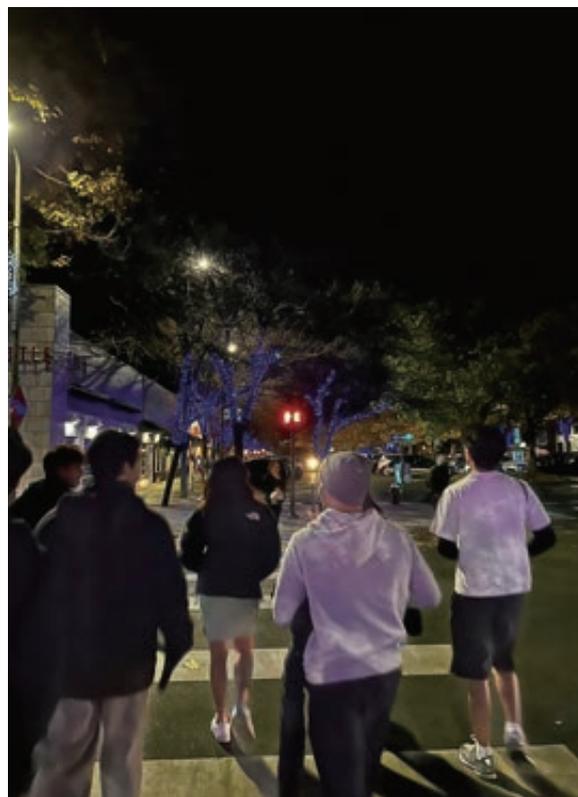


た。さらに、2週間に1度は、トークタイムと呼ばれる、ワッ
コムコミュニティカレッジの留学生と近郊のウェスタンワ
シントン大学の留学生が交流できる機会がありました。そ
こでは、お互いの自己紹介や母国の文化について英会話
をする機会が数多くありました。そこでも、英語表現能力
を身に付けることができました。

このように、米国ワッコムコミュニティカレッジでの経験



は英語学習や、様々な国籍の留学生がいるため、自分の
英語力向上と価値観を広げる良い機会でした。また、私は
将来、教員を志望しています。その中で、先ほど述べたよう
な経験ができたというのは、非常に役に立つはずです。自
分の将来に向けて、英語力はもちろん、広い視野と、柔軟
な思考を養うには留学という選択肢は有益だと実感した
6か月間でした。



充実した留学生活

国際学部 国際学科 山口 夕葵

私は2023年8月25日から2024年2月21日の約6か月間、韓国で留学をしていました。私はこの留学が初めての海外でした。留学が決まってからはパスポートを取ったり、ビザの申請をしたり準備が進んでいくと同時に本当にこれから韓国に行くのだなと実感が湧いていました。日本を出発し、飛行機の中では韓国で友達が出来のかなとか韓国語話せるのかなとか不安と緊張でいっぱいでした。いざ韓国に到着すると、その日は必要なものを揃えるため近くのマートで買い物したり忙しくバタバタで終わりました。語学堂が始まるまでの約1週間は友達と明洞で観光したり、ご飯を食べに行ったり、初めての韓国のコンビニでテンション上がったり、満喫した1週間を過ごしていました。

語学堂の授業は9月に入ってから始まりました。語学堂を受ける子は全員で8人しかいなくそのうち7人が日本人、1人は台湾の子でした。初めは授業のスピードについていけないか、先生の話を理解できるかもとても不安でした。けれど始めてからは、わからない所があったら先生や周りの友達が教えてくれたり、授業中の雰囲気も良く楽しく授業を受けることが出来ました。語学堂以外にも大学の授業を受けたり、韓国語を助けてくれるチューターの子

と一緒に出かけたり勉強会したり、とても充実した日々を過ごしました。このチューターの子が初めてできた韓国人の友達で、ルームメイトと3人でたくさん遊びに行ったり今でも毎日連絡取り合うくらい仲良くなりました。

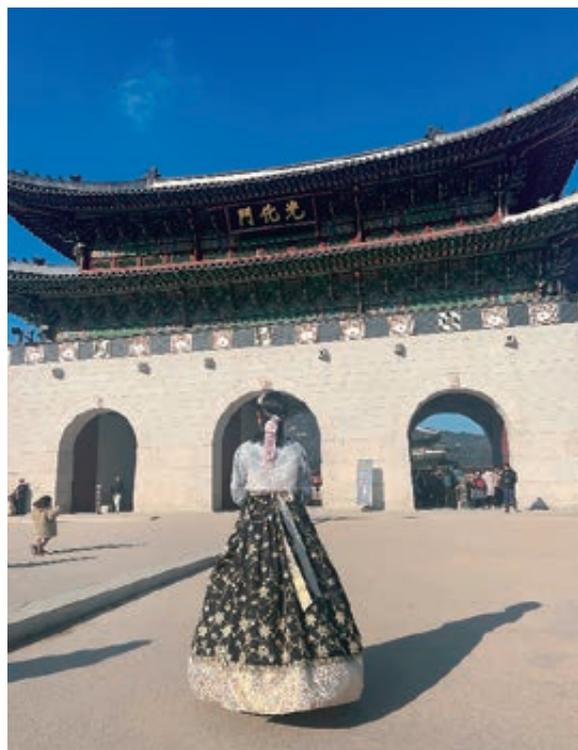


韓国に来てしばらく経ち、まだ周りの環境に慣れていなかったのか、10月にコロナに感染して1週間隔離生活しなければいけなくなり、11月にはインフルエンザにもかかり、40度の熱が出て点滴したりなどしんどかった時期

もありました。日本にいる時はめったに体調を崩すことがなかったので海外に行っても大丈夫だと思っていましたが体調を崩してしまい、友達にたくさん助けてもらいました。

留学が半分過ぎたくらいからは生活や環境にも慣れていき、授業終わりに友達と少し遠出をして海が見えるところまで遊びに行ったり、おしゃれなカフェに行ったり、ずっと着たかった韓服を着たり、美味しいものたくさん食べに行ったりしました。韓国人の方々と会話する機会も増え、来た当初よりも聞き取れる単語がだんだん増えていき、店員さんとのコミュニケーションもスムーズにとれるようになっていました。

この留学を通して、韓国の文化や習慣についてもっと理解が深まり、様々な方々と交流でき、韓国語も留学に行く前と比べ自信を持てるようになりました。留学生活の全てが良い思い出で、とても貴重な時間でした。たくさんの素敵な人と出会え、留学して本当に良かったなと思いました。



私の韓国生活

国際学部 国際学科 佐々木 初和

私は韓国で1年間の留学をした。その期間にあったこと、感じたことを書きたいと思う。

最初は、正直旅行気分だった。元々韓国のアイドルや食べ物が好きだったこともあり、韓国に来てしたいことができる期待が大きかった。カフェに行ったり、友達に会ったりとしたいことが多かった。しかし来る前から留学ビザや保険、準備するものが多く、少しずつ実感が湧いたのが思い出される。

いざ韓国についてからは、授業の説明やクラス分けテスト、他にも外国人登録や銀行口座作成など、実際に住んだり留学したりしないといけない経験をたくさんした。私は少し韓国語を話せたので、語学面ではそんなに緊張していなかった。それでもやはり、外国人登録や銀行口座作成などの手続きをするのは、日本語でも難しいので緊張したし難しかった。

授業は秋学期から参加した。秋学期のクラスは日本人7名と台湾人1名の少人数クラスだった。先生は韓国人で、予想はしていたがすべて韓国語での授業が始まった。韓国語検定のTOPIKでいう3級程度のクラスだった。私は今までほぼ独学で学んだため、単語や文法をまともに勉強することが初めてで、すごく難しく感じた。しかし中高で英語を勉強するような試験重視の授業ではなく、ペアで話し合ったり討論や発表をしたりと実際に話す機会が多く、とても力になる授業であった。私が特に授業の中で思い出されるのは、発表だ。パワーポイントと原稿をすべて韓国語で準備するのだが、韓国語でタイピングをしたことのない私にとってすごく難しく時間のかかる工程だった。話したい事、書きたい事は思いついているのに、それが形になるまでがとても時間がかかった。まさかこんなところで躓くとは思っておらず、メンタル的にも辛い課題だった。

その他にも授業では、特別授業として歴史的な建物を見に行ったり、韓国料理を学べる教室に行ったりと様々な体験をすることができた。韓屋が昔のまま残っている村に行った際には、歴史の説明が韓国語で書いてありそれ

を読んで勉強した。ソウルという大都会に、京都の街並みのような村が残っていることを不思議に思いつつ、韓国の人々の歴史を大切にしようという姿勢が見えて尊敬できた。韓国料理を作った際にはチャプチェを作った。自分がまさか韓国料理を本格的な味に作れると思っていたのに、すごくおいしく作れて先生も褒めてくださったので、とてもいい思い出になった。

韓国に来て2週間ほど経った頃に、トウミという韓国人学生の人といろいろな所に出かけ、助けてもらうパートナー制度が始まった。同い年の女の子で彼女も日本語を勉強していると聞いた。彼女とは漢江という韓国の大きな川に行ったり、お酒を飲みに行ったりと、本当の友達のように遊んだ。現地の若者が使う韓国語を教えてもらったり、恋愛の話までしたりして盛り上がった。とてもいい思い出を作ってくれて感謝している。

私は留学生活をしながら、韓国人との関わりが先生方、トウミしかないことに気が付き、あるアプリを始めた。ハロートークといういろいろな国の人々と話せるアプリだ。



言語を勉強する際に重要だと考えるのが、実際に現地の人と話すことだ。その為にそのアプリで連絡や電話をして、仲良くなった人とは会ったこともあった。危険なことに巻き込まれるかもしれないので十分に気を付けながら、意欲的に外に出て人に会った。言葉を教えあったり、文化を教えてもらったりととても勉強になって、してよかったと思えた。それからアプリで知り合った人以外にも、近所のスーパーなどでも意欲的に話した。時々発音が悪く通じないこともあったが、それも経験だと思い練習をした。

実際に人に会って話してみると、韓国と日本は政治的に関係が良くないことがイメージされるが、少し違うことが分かった。確かに日本の政治的な部分を嫌っている人は見た。しかし日本人を嫌いだと言うとか、直接悪口や危害を加えるような、そんな乱暴な人は居なかった。むしろ日本から来たことを伝えると韓国語を褒めてもらえたり、いつから勉強しているのかなどたくさん話してもらえた。実際にこのような経験ができてうれしかったし、これからもっともっと関係が良くなるはずだと信じたい出来事だった。

留学が始まるまで私は、日韓両方の国の人々がほんの少しでもお互いにいい関係になったらいいなと思い、韓国語の勉強をして来た。そのせいか実際に韓国の人々と



会って、優しくしていただいた経験はこれからもっと韓国語の勉強をする際に大きな糧になった。1年間の韓国留学の経験が無駄にしないように、これから生活していこうと思う。

韓国での1年間

国際学部 国際学科 山中 香織

私は2023年8月25日～2024年8月17日までの約1年間、韓国ソウルにある聖公会大学へ留学しました。私が韓国語に興味を持ったきっかけは、高校生の時にK-POPにハマったことでした。ただアイドルが好きで見ているだけでしたが、徐々に韓国語についてもっと知りたい、話してみたいなどと思うようになり、大学1年生から本格的に学ぶようになりました。教科書には無い文法や単語を学び、外国文化を直接肌で感じてみたいと思い留学を決めました。

初の海外、初の韓国ということもあり初めはワクワクドキドキして、緊張や不安はもちろんありましたが楽しみの気持ちの方が大きかったと思います。到着した日から私と周りの友達の韓国語能力の差が大きく焦りを感じたことは今でも鮮明に覚えています。

私は4学期制で行われる授業に通うことが必須でした。初めての授業、秋学期は慣れない環境での生活と授業についていくことに必死で、慣れるまでの間の2、3ヶ月は本当に大変でした。聖公会大学での語学堂はほとんどの生徒が日本人で少数制の授業だったので、クラスみんなと仲良くなることができ助け合いながら、週末には一緒に出かけたりしていました。また冬学期、夏学期の語学堂は聖公会大学では実施されない為、1駅隣りにあるカトリック大学まで通い授業を受けていました。カトリック大学では、韓国語を学びに来ている学生だけで教室が足りない程の生徒数であり、日本人学生はほとんどいませんでした。私にとってはとても良い環境であって、色々な国の友達を作ることができ、実力も友達を作ることに伴い上昇したと思います。教科書の問題が解けることも重要なことですが日常会話を通して得ることも多く、韓国語で会話ができる友達をつくるのが実力を伸ばす1つの手段であることに気がきました。

韓国に行って半年間ぐらいは、明洞や弘大、景福宮などの観光地を巡りました。明洞や弘大はショッピングができる場所や有名なお店が揃っているため何度行っても楽しめる場所であり、私も頻繁に行っていました。観光地では

韓国にいるのに日本人観光客が多く、日本にいるように感じる時があるほどでした。その時困っている日本人の方を助けた時は凄くやりがいを感じました。

韓国では、日本の様にコンビニにお手洗いが無く、ビルの中や飲食店のお手洗いを利用することがほとんどですが、そのお手洗いにはパスワードや鍵が必要な時が多く、その場合にはお店を利用しなければなりません。そしてそのお手洗いでは、トイレトペーパーがないことが多く、行く前にお店に置いてあるペーパーを各自で持っていくか、持参しなければならず、ペーパーを流せない所がほとんどでした。この違いは日本では体験することができないことだと思います。またソウルは特に伝統が反映され



ている所が多いと感じました。昔の家や街並みをイメージにした道や建物が多く、そこでしか見られない風景や歴史を感じることができます。また日本よりも山が多いため、夜景を見られるスポットも多いと感じました。そして今の韓国は日本ブームが到来しているようでした。日本製品や食べ物はもちろん、日本語を話せる人が多く、声を掛けてもらうこともあり交流も楽しむことができました。そして日本人は何事にも丁寧で慎重に考える傾向がありますが、韓国人は全てにおいてはやく、大雑把なことが多いため、バスでは必ず手すりやつり革を持つこと、降りる時ははやくめに扉の前で待機すること、地下鉄は時間通りに出発到着することは少ないため、時間に余裕をもって乗ることなど全てにおいてはやく行動することでした。また食事する際は必ずどんな料理にもキムチがあること、あぐらをかいて座っても良いがお皿は持ち上げてはいけない、目上の方の言うことには絶対なども知りました。

やりがいを感じたのを機にどんなに勉強を頑張っても思うような成績を出せず、諦めてしまいたいと思った時は何度もありました。その時私は一度韓国語から離れリフレッシュをして、また勉強をしなければならない状況に持

ち込むことで最後までやりきることができました。

上記以外にも色々なことがありましたが留学の1年間で振り返り、大変なことも本当に多かったその反面、楽しかった思い出も沢山持って帰ってくることができました。誰でも簡単にできることでなく、この時にしかできない貴重な経験をさせてくれた両親には感謝の気持ちでいっぱいです。これからの人生においても一生の財産であり、消えることはない、できないものとなりました。後悔なく無事に終えることができ良かったです。これからもこの経験を活かしていきたいと思います。



オーストラリア留学を通して学んだこと

国際学部 国際学科 竹國 倫太郎

オーストラリア留学を決意した動機

私がオーストラリアへの留学を決意した動機について、最初に説明したいと思います。世界的に社会のグローバル化が進む中で、将来日本においても、日本語だけでなく英語でコミュニケーションを取る機会がますます増加すると思います。私は中学1年生のときから約7年半、日本で英語を学んできました。しかし、私は英語のリスニングとスピーキングが得意ではありませんでした。なぜなら、日本では英語でコミュニケーションを取る機会がほとんどないからです。私自身の英語コミュニケーション力を飛躍的に向上させるためには、オーストラリアのような英語を母国語として話す国で長期留学することが一番の近道だと考え、オーストラリア留学を決意しました。

サン・パシフィック・カレッジ(SPC)ケアンズ校(協定校)について

私がオーストラリア ケアンズへの留学を希望した理由は、ケアンズは関西空港から直行便で約7時間半と近く、1年を通して温暖な気候で過ごしやすいことです。さらに、サン・パシフィック・カレッジ(SPC)ケアンズ校は、キャンパス内に教室はもちろん、学生寮、食堂、スポーツ施設などが整備され、とても利便性が高く、集中して学業に励めるからです。また、SPCケアンズ校は、授業や日常生活では“English Only Policy”のため、英語での生活になりますが、日本人スタッフが常駐しているため、緊急時や何



か困ったことがある場合、すぐに相談できるので、とても安心です。また、SPCケアンズ校は大阪産業大学の協定校であることも安心感があります。

SPCケアンズ校の英語授業について

2023年9月10日に、SPCケアンズ校に到着すると、まず初めにオリエンテーションがありました。いきなり全ての説明が英語で行われ、圧倒されました。耳も頭も英語に慣れていない状況で、この先あと半年間の生活ができるのか、期待や楽しみよりも不安な気持ちで留学生活が始まったことを今でも覚えています。学校のルールで、キャンパスの中では“English Only Policy”のため、英語だけで生活する必要があります。

SPCの授業では、最初にクラス分けのテストがあります。このテストの結果で、自分がどのクラスに配属されるかが決まります。クラスは初級者向けから上級者向けまで幅広く開講されています。Elementary(初級)、Pre-Intermediate(初中級)、Intermediate(中級)、Upper-Intermediate(中上級)、Advanced(上級)の5クラスに分かれていて、適切なクラスを受講できるようになっています。また、クラスのレベルが自分に合っていないと感じたら、担当の先生に相談すると、自分のレベルに合ったクラスに変更してもらうこともできます。

私はPre-Intermediateからスタートしました。このクラスの英語授業で学ぶ文法項目は、日本の学校の英語授業では、中学3年から高校レベルの内容でしたが、これまで習ってきたものが全て英語での説明となると、全く別のも

のに感じました。また、何より「リスニング」が一番の難所だったので、最初の頃は全然聞き取れず、しんどい思いをしたり、クラスメイトに助けってもらったり、その場しのぎをしてなんとかやり過ごしていました。しかし、10月中盤を過ぎた頃には段々と聞き取れるようになり、自分の成長を如実に感じ取れるようになったことが、とても印象に残っています。

「スピーキング」の方は、とりあえず何か喋ってみて、相手のリアクションを見ながら、少し戸惑った感じがしたら別の表現を試してみることを、何度も繰り返します。また、授業の内容は、習った文法項目をすぐにグループワークで使用したり、例文を日常会話に織り交ぜたりして、実際に使えるようにする取り組みが、日本と違うところだと思いました。

テストは、週に一度小テストがあり、40日から50日毎に1回大きなテストがあります。

オーストラリアでの生活—買い物や文化の違い—

オーストラリアでは、1つの大きなショッピングセンターに、スーパーマーケットが2、3店舗あり、販売しているものはだいたい同じですが、店舗によってセールをしていたり、その店にしかないサイズのお菓子などがあって様々です。オーストラリアのスーパーで驚いたことがいくつかあります。その1つは、スーパーでSIMカードが販売されていることです。オーストラリアでは、ケータイショップで契約するのではなく、自分の使いたいプランを自分で決めて、月々支払うという仕組みでした。

バスの乗り方は、日本とは逆で、先に行き先を伝えて料金を支払ってから席に座るシステムです。また、バスの



チケットは3種類あります。運転手さんに行き先だけを伝えたと「シングル(Single)」という片道料金になりますが、「デイリー (Daily)」という1日乗れるチケットもあり、往復の場合は「デイリー (Daily)」を購入します。さらに、1週間乗り放題の「ウィークリー (Weekly)」もあります。レシートがチケットの代わりになるので、無くさないようにしっかり保管する必要があります。

また、市街地のショッピングセンターの営業時間が短いことに、とても衝撃を受けました。日本では、10時に開店し、20時か21時頃に閉店するのが一般的ですが、オーストラリアでは、9時から開店し、16時か17時頃には閉店するなど、営業時間が短いことが、とても印象に残っています。

また、オーストラリアでは仕事に対してすごく気軽で、期限についても緩いと感じました。例えば、寮生活でエアコンが壊れたときに、業者のスタッフさんが修理に来たと思ったら、パーツがないからまた来ると言って、一週間経っても来ないこともあり、日本との文化の違いを大きく感じました。

一番大きな出来事は、12月に巨大なハリケーンが来たことです。雨と風がすごく強く、バナナの木や葉が何本か飛ばされたり、寮がもう少しで浸水する事態に見舞われました。少しの間、断水して生活に支障をきたすことも多くありましたが、ルームメイトと英語で話す機会も増えて、結果的にプラスに働きました。

キャンパス・学生寮での生活

授業を受けている学生の年齢層は、20代30代が多いと感じました。また、学生の多くは、中国、韓国、台湾などアジア圏出身の学生や、ポルトガルやブラジル出身の学生が多い印象を受けました。もちろん留学で来ている人もいますが、ワーキングホリデーで来ている人も多かったです。

初めての寮生活で、最初はルームメイトと馴染めるか不安でした。世界の様々な国から来ていて、ここでも発音やイントネーションの違いに苦しみましたが、みんな優しくゆっくりでも話を聞いてくれたりして、とてもありがた



かったです。寮での生活は不便なことも多かったですが、全員同じ環境で生活しているため互いに理解できることもあり、気楽に過ごすことができました。

留学を通して最も学んだこと

今回の留学を通して、最も学んだことは「挑戦することの大切さ」です。日本だと失敗したら白い目で見られたり、がっかりされることが多いですが、留学中は常に挑戦しなければならない環境に置かれていたため、ためらっている場合ではなかったこと、挑戦して失敗しても責められたり、とがめられたりせず、むしろ褒められたりすることが多かったです。挑戦することに対して寛容な人が多く、新しいことに挑戦しやすい、良い環境だと思いました。

最後に「学んだことをどう活かすか」

今回の留学で、これまでの自分の英語力が、留学前と比較して明らかに向上したことを、身を持って経験できました。今後この経験を活かして、TOEICテストにチャレンジしたり、就職活動では、旅行会社や航空業界など、日本と海外をつなぐ仕事に就こうと考えています。

最後に、留学しようか迷っている人がいるなら、是非とも留学にチャレンジして欲しいと思います。金銭的な問題などクリアしなければならないこともあるかも知れませんが、実際に英語圏に留学することで、自分の想像以上に英語力を向上させることができるだけでなく、自分の価値観や視野を大きく広げることができます。



オーストラリア留学体験記

国際学部 国際学科 重田 力輝

留学を決意したきっかけ

私は、2023年9月9日から2024年2月3日の約5か月間、オーストラリアのサン・パシフィック・カレッジ(SPC)ケアンズ校に留学しました。私はもともと英語圏の文化にとっても興味があり、機会があれば英語圏の留学にチャレンジしたいと考えていました。今回、コロナ禍が落ち着き、英語圏の長期留学が再開されたと聞いたとき、私は迷うことなく留学することを決意しました。

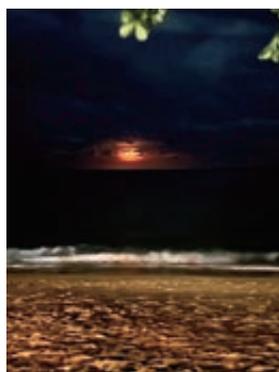
私は高校生の時に、修学旅行でオーストラリアのケアンズに行きました。わずか3日間の短い旅行でしたが、ケアンズの景色や現地の人の温かさがとても好きになりました。このため、今度はケアンズで長期留学にチャレンジし、英語コミュニケーション力の向上はもちろん、学生寮での生活と、現地のホストファミリー宅での生活も経験したいと考えました。

オーストラリアでの滞在について —学生寮とホームステイの生活の違い—

私は今回の留学を通して、前半の約3か月半を学生寮で生活し、後半の1か月半をホームステイで生活しました。どちらの生活も経験できる貴重な機会に恵まれました。

学生寮での生活は、学生寮が学校のキャンパス内にあるため、通学がとても楽でした。また、世界各地から集まるルームメイトと英語でコミュニケーションを取ったり、プールで泳いだり、友達と一緒に近くのビーチまで散歩しに行ったり、様々な経験ができ、とても有意義で楽しかったです。

ホームステイの生活は、実際に現地で暮らしているホストファミリーと一緒に生活するため、日本語やゆっくりしたスピードの英語に逃げることができない環境です。だからこそ、もっと必死に英語を聞き取るように努力し、話す発音などにも注意しました。その他、夕食の時間までに帰宅して、ホストファミリーと一緒に夕食を食べたり、週末にはホストファミリーと一緒に出かけたり、ホームステイなら



ではの有意義な時間を過ごすことができました。日本にいる母親と電話で会話した後に、ホストファミリーと会話をした際、英語が吐嗟に出てこない経験をしました。英語漬け生活の大切さについて、身をもって実感しました。

SPCケアンズ校での学生生活について

SPCケアンズ校での留学中で、特に印象に残っていることは、日々のアクティビティを通して、諸外国からの留学生と交流できたことです。特にハロウィンやクリスマスな

ど、大きなイベントでは、学生はもちろん先生方や学校のスタッフの方々も参加され、楽しく素晴らしい経験ができました。実際、これらのイベントを機に、諸外国からのクラスメイトとの仲が深まり、休日と一緒に出かける機会も増えました。

留学中の英語学習について

留学する前は、私は英語力に関してはある程度自信がありました。いざオーストラリアに行くと、自分の伝えたいことを英語で相手に伝えることができないこともあり、最初は苦労しました。しかし、約5か月間のオーストラリア留学では、月曜日から金曜日まで毎日4時間の英語授業があり、授業に積極的に参加し、課題をしっかりとこなすことで、英語4技能(リスニング、スピーキング、リーディング、ライティング)をバランス良く向上させることができました。

日常生活の英会話はもちろん、SPCジャーナルという英語で記述する日記を通して、英語で書く力も身につきました。

今後、今の英語の実力を維持するため、英会話教室に通ったり、就職活動のためにTOEICにも挑戦したいと考えています。

留学で最も成長できたこと

留学を経て、自分が成長できたと思うことは、価値観の違いを学ぶことができ、何事にも物怖じせず、前向きに挑戦したいと思えるようになったことです。今後は、他の国々を訪問して、世界中の人々と英語でコミュニケーションを取りたいと考えています。

最後に—今後留学を考えている人へのアドバイス—

最後に、今後留学したいと思っている人にアドバイスがあります。英語の基礎は、留学前にしっかりと勉強しておいた方が良いと思います。英単語と発音の勉強は特に重要です。これらの実力がないと、会話に入っていくことができず、周りに溶け込みにくくなります。留学するということは決して容易なことではなく、特に留学の最初は言語や文化の壁に当たります。しかし、留学は自分の価値観や存在意義を変えられる最高の機会であり、留学を終える頃には、この経験が生涯においてかけがえのない財産になります。



約1ヶ月のオーストラリア生活にて

経済学部 経済学科 稲葉 淳一

僕は、この約1ヶ月でたくさんのことを学びました。僕がオーストラリアに留学を決めた理由は今のままの自分でダメだと思ったから。また英語を学び直すきっかけが欲しかったから。あと、便利で洗練された文化を持つ日本にとどまるだけでなく海外を見たかったからです。海外に一度も出ずに日本で働くのはすごく嫌で刺激が欲しかったのかもしれませんが。僕は英語が全然できず、全く話すことができませんでした。日本にいたとき中学、高校、大学と英語をたくさん勉強しましたが文法や単語の暗記が退屈で授業を受けても面白くなく、一切勉強をするのをやめた時期がありました。でもこれからの時代もっと海外と交流する機会が増えるでしょうし、世界が変化するスピードも昔と比べて速くなる。そんな時代に日本語しか話せないのは不利ですし、絶対に英語が必要になると僕は思いました。だから英語を覚えたい、話したいと思えるきっかけが欲しいと思いオーストラリアに行くことにしました。実際行ってみてまずいろんな価値観や考え方が変わりました。オーストラリアでは日本と違いカジノや日本では売っていないタバコなどがあり、良くも悪くも自由なところが多く面白かったです。ホストファミリーの知り合いで日本に旅行したことがあるオーストラリア人の人と話をした時、日本は他国と比べて働きすぎていると言っていました。たまにその話は日本でも聞いていたのですが、外国の人に実際に話を聞いてみるとそんなに違うのかと驚きました。日本では24時間営業のお店が珍しくないのに、オーストラリアの

ほとんどのお店は18時になると営業を終了するので、文化の違いにびっくりしました。

また、オーストラリア人含め海外の人は嫌なことや何かして欲しい時、日本人ならここでは言わないだろうな、というところでもたくさん発言していて日本人にあまりない所をたくさん見ることができました。どんどん発言していくことが大事なのだなとこの時学びました。

SPC語学学校に通い、たくさん日本人や外国人と友達になることができました。まずそこで驚いたのが大体の人が日本人と比べ時間をあまり守る人が少ないところです。この文化の違いは良いのかどうか分かりませんが、授業が始まって30分後に来たり、1時間後に来たりする人が普通にいてびっくりしました。しかし学校側も甘いのので1時間後に来ても出席にしていたのを見て文化の違いを感じました。授業は全部英語なのではじめは何を言っているのか全然分からず落ち込んだことが何度もありましたが、約1ヶ月半英語を聞いていると、少しずつ聞き取れるようになっていきました。この時はとても嬉しかったです。僕は日本で英語を書いて覚えることが多かったのですがリスニングの方が大切なのだなと実感しました。英語が話せるコロンビアの友達にどうやったら英語が上手くなるのか尋ねると、日常を全部、英語にして過ごすことが大切だと教えてくれました。本を読む時や映画を見るときなどを英語にするといいと聞き、家で実践してみることにしました。まだ効果を感じることができないけれど続けてみようと思います。

僕は昼食の時、大学では一人で食べることが多いのですがオーストラリアでは色々な外国人と一緒に食べました。友達と食べるとこんなに楽しいのだなとこの時知ることができました。友達と飲みに行った時、お酒の度数が日本より高いことに驚きました。ですがとても美味しくてびっくりしました。

僕がオーストラリアに来てとてもびっくりしたことは、どの店でもキャッシュレス化が進んでいる所です。日本と違いどのお店でもカードを使うことができ、驚きと共に日本



に少しがっかりしました。もっとカードや電子マネーを進めるべきだと思いました。

あと、オーストラリアの人はマスクをしていません。僕がオーストラリアに着いた初日に、マスクをつけてホストファミリーにあったら「風邪なのか?」と心配されました。オーストラリアは夏ですが、日本人は夏でもマスクをしているので、この違いにも驚きました。

今回オーストラリアに留学し、たくさんの経験やいい思い出を作ることができました。英語の勉強をやり直すきっかけにもなり、すごく充実した約1ヶ月半になりました。初めは怖くて行くのがとても怖かったけど、勇気を出して行ったことでたくさんの出会いがありました。本当に行っただけ良かったと思いました。また、何事も自分から行動しな

いといけないのだなと今回の留学で実感しました。

これからはどんどん自分から行動して英語を覚え、世界に出て行きたいです。



オーストラリアでの五週間

経済学部 経済学科 竹内 祐人

初めに、今回のサンパンフィックカレッジブリスベン（オーストラリア）への留学に携わった関係者の皆様方、留学という機会を与えていただきありがとうございます。また、私の人生を大きく変える貴重な体験をさせていただき心より感謝いたします。

それでは本題へ入ります。私が今回のオーストラリアへ留学へ行くきっかけは、四つあります。まず「外国への憧れ」です。英語を通じて世界中の人と話したい、これまでの環境と違った場所で生活したい、違った文化に触れたいといった外国への憧れがありました。次に「語学力の向上」です。私は英語を通じて世界中の多くの人と話したいなどといった外国への憧れがあった一方で、私自身の英語力は乏しいものでした。しかし英語力が乏しいからこそ英語中心の生活に身を置くことで語学力を向上できるのではないかという思いがありました。三つ目に「友人からの勧め」です。去年の春までは国際交流課の留学制度の存在自体知らない程でしたが、去年の春に友人が国際交流課の留学プログラムを使いオーストラリアのケアンズへ留学し、そこでの体験を耳にして私も留学へ行きたいという気持ちになりました。最後に「何かを求めて」です。これは留学を通じて自身身の興味や関心のある分野を見つけるといった新しい発見や、何かを求めることで今の自分と変わったことを見つけれられるのではないかという事を考えました。そして上記で述べた四つのきっかけにより留学へ行く事を決意しました。そこから国際交流課の春期英語



中期留学へ申し込み、英語試験(IPテスト)、面接の選考の審査の結果私の留学が決まりました。留学が決まった瞬間は、私自身初めての海外という事もありとてもワクワクしていたことを覚えています。初めての海外だったのでパスポートを作るところから始まり、クレジットカードの作成など次から次へとやるべきことが出てきて大変でしたが、全てオーストラリアへの希望と憧れで胸を膨らませながら準備していました。しかし留学への日が近づくにつれて、ホストファミリーとのコミュニケーションの面やオーストラリアでの生活面に対して不安を抱いたのも覚えています。そしてオーストラリアへ到着しオーストラリア人のホストファミリーと対面することになりとても緊張しましたが、とてもやさしい方で温かく迎え入れられオーストラリアへの留学がはじまりました。家ではシャワーの時間が十分以内、一週間に一回の洗濯などのルールが定められていました。私の現地の家での生活は夜ご飯を食べた後にホストファミリーと一緒にテレビを見ながら談笑をしたりしていまし



た。私はホストファミリーとの会話の時間を大切にしており、文法が完璧でなく下手でも良いからとにかく話すことを意識していました。特にホストファミリーがよく使う表現や単語をメモして生活の中で使ったりするなどをしていました。現地の語学学校は家からバスを使い三十分程の所に位置していたため通いやすかったです。語学学校では英語だけの会話が許されており、英語を伸ばすのに最適な環境であると感じました。また初日の語学学校ではクラス分けをするためのテストを行い、昼からの授業への参加となりました。初日の授業への参加はとても緊張しました。私のクラスはコロンビア人やブラジル人が多く日本人が少なかったです。クラスでは日本と違い、私以外の生徒が授業に対して積極的な発言や意欲的に前に出て発表す



るなどクラスの雰囲気飲み込まれ、ほとんど言葉を発さないまま終わったことを覚えています。しかし二日目からは間違いを恐れず積極的に発言し、他の生徒との会話を試みました。その結果同じクラスの生徒だけでなく、違うクラスの人たちと仲良くなり、休日には遊ぶなどをして私の良い思い出となりました。最後に、今回の留学を通して英語を使って会話をする楽しさを知りました。長期留学と比べると語学力の向上は短期的かもしれませんが、日本でも英語を使う機会を増やし、継続的に勉強することで語学力を成長させることは可能だと思います。また私はこれからも英語を使っていき、将来に活かせるようにしていきたいと考えています。そして私の人生を変えてくれた留学へ行ったことに感謝します。ありがとうございました。



私のオーストラリア留学

デザイン工学部 建築・環境デザイン学科 島本 千怜

私は二回生の春休み期間に、オーストラリアのブリスベンという都市でおよそ5週間、語学留学を行いました。小さいころから英語が好きだった私は人生で一度は留学をする決めていたため、時間のある学生のうちに留学を決意しました。そして自分自身の英語力をアップさせたいという目的をもって留学に参加しました。オーストラリアの気候は比較的過ごしやすいこと、また現地の人々が温厚であるということからオーストラリアに決めました。

そんな私が通った語学学校はSPC Brisbaneです。この学校はブリスベンの市内にあるため、通学がしやすくショッピングも容易でした。私がこの学校に決めた理由は、校舎の立地と「校内ではOnly English」というこの学校独自のポリシーです。せっかく留学をするなら、英語を積極的に話したいという強い思いが私にはありました。また、それを実現させるために留学中はホームステイをしていました。ホームステイは現地の人と共に生活することができ、英語を話すにも文化を学ぶにも最適な方法だと私

は思っています。ホームステイをすることで視野が広がり、新しい価値観を増やすことを目的としていました。

私のホストファミリーは夫婦と二人の子供がいる家庭でした。学校から帰ると、今日あったことを話しながら家族全員で夕食を食べ、夜には一緒に映画やドラマを見たり、本当の家族のように過ごすことができました。食後はホストシスターと共に飼い犬と遊んだり戯れたりしていました。このようにペットを通して家族とコミュニケーションをとることもありました。約5週間一緒に生活をする中で日本とオーストラリアの文化の違いをたくさん見つけることができました。それらの違いは私にとってネガティブなものではなく、ポジティブなものが多かったです。

家族との時間や、睡眠時間、友達とのコミュニケーションや授業でのディスカッションなど、私の生活を見直さなければならぬ部分を文化の違いが教えてくれました。

私の現地での生活は日中は9時から15時まで学校へ行き、放課後は友達と遊びに行くといった感じです。学校の周辺にはカフェやお店、散歩道などがたくさんあるため、毎日楽しむことができました。私が遊んでいたのは語学学校でできた外国人の友達が多かったので、校内だけに限らず放課後も英語を使ってコミュニケーションをとっていました。学校ではコロンビアやブラジル、ベトナムなどそれぞれ違う母国語を持つ国の人々に出会いました。普通なら言葉を理解できずコミュニケーションをとることが困難ですが、その壁を打ち壊す英語の偉大



さを実感しました。やはり、英語は世界各国で必要とされている言語であり、誰とでも話すための最強のツールであることを実際に体感することができました。私が英語力をアップできたきっかけとして、授業が楽しかったこと、また現地で出会った学生が素敵な人ばかりだったことです。それぞれがモチベーションを持ち、お互いに高めあう環境に

行くことができたことにすごく感謝しています。留学は語学を学ぶだけで終わらず、自分の視野を広げることのできる大きな一歩であると感じました。たった5週間という短い間でできた経験、出会った友達、家族、先生どれも忘れることのできない私の財産です。

結果良ければすべてよし

国際学部 国際学科 小林 千鶴

私は2023年の9月から1年間フランスに留学しました。フランスはヨーロッパにある国で、エッフェル塔や凱旋門をはじめとする建築物、美術館などの歴史的なものもあれば、ファッションや化粧品の高ブランドなど世界の先端に行くようなものもある場所です。また、首都のパリは旅行先としても人気が高く、「フランスは素晴らしい国だ」と考える人も多いのではないかと思います。今回この留学記では、私が留学に行き感じたフランスと日本の考え方の違い、私が思う問題点をいくつか紹介したいと思います。

まず、フランスは休みが多く休日は営業していないお店が多いです。また、仕事でも従業員同士で世間話をしたり、ケータイを見たりと、規則の緩い職場が多い事に驚きました。中でも特に驚いたのは、美術館のスタッフです。思わず、「あなたは仕事ではないのですか？」と尋ねたくなるような仕事ぶり、私が鑑賞するために美術館の中に入っても「bonjour.」と一応挨拶はしてくれるのですが、こちらを向く事もほとんどなくケータイを見たままでした。



日本ではあり得ないこの光景に美術品を見るよりも驚きました。なぜこのような事が許されるのか、はっきりとした理由は分かりませんがフランスには必要な時に必要な仕事が出来ていれば、その他は何をしようがあまり関係がないという結果重視の風潮があるのだろうと感じました。

このように感じた例は他にもあります。スーパーで野菜や果物などを買う際、大きさや形が悪くても商品として並んでいたり、たまには腐った物と一緒に並んでいたりします。現在のフランスでは、地産地消、国内の製品、BIO製品を買おうという取り組みが日本よりも多くの人に広まっています。日本でもコロナ禍に入りふるさと納税や地産地消の制度が流通し始めたと思いますが、フランスでも同じように地産地消が流通しました。しかし、フランスは日本とは違いネットでの食品の買い物は主流ではなく、農家や牧場に自ら出向き物を買ったりBIO専用のスーパーで買ったりと、消費者が自ら出向くというケースが主流になっています。これは日本とは違い、量り売りの制度で物



を買うからだとは私は考えます。小さい物がほしい人もいれば、大きい物がほしい人もいるという消費者のニーズに合わせたからこそこうなったのではないかと考えます。そのため、農家直産店に限らずスーパーでも結果的に食べる事が出来るのだから小さかろうが大きかろうが関係なく売るといった考えがあるようです。

ここで一つつながる話として、フランス人は使う事が出来れば壊れるまで使う事が多いという事が挙げられます。例として、フランスのトイレは汚い場所が多く、有料で入れるトイレでも便座がなかったり、水を流すボタンが壊れたりしていました。私が初めて語学学校に行った日、学校の多目的トイレに便座がないのを見て、「多目的トイレの便座がなくて大丈夫なのか」とすごく不思議に思った事を今でも覚えています。その他にも、お店のガラスが割れていてもそのまま又はガムテープを貼って補強しているだけというお店や、電気が点滅している場所があったりしました。電気会社や水道会社の修理料金が高い事もあり壊れている物が多かった印象なのですが、結果的に使えている

から良いという考えなのか、生活している人々もそれを全く気にしていないようでした。必要最低限でまかなうという考えは無駄をなくす良い方法なのではないかと思いましたが、見栄えや安全面、他人からの印象の事も考えると改善した方が良いところもあるのではないだろうかと思いました。

私の留学生活での学びや気づきは上記に例として、挙げたものだけでなく、他にも沢山あります。例えば、ジェスチャーでも良いから言いたい事ははっきり言わないと相手には伝わらない事、挨拶をする事の大切さと挨拶される喜び、勉強して来た事の成果が実ったときの達成感、勇気を出して挑戦した事に対して結果はどうであれ自分の力で道を切り開き、新たな事をする大変さなど挙げればきりが無いほど沢山の事を学びました。この1年間の留学は私の人生にとってとても大きな経験になり、多くの気づきを得た時間でもありました。私は留学に行っても良かったと心から思います。

朝鮮語海外研修での経験

国際学部 国際学科 安達 ころこ

私は、この夏、朝鮮語海外研修に参加しました。私は、K-POPや韓国ドラマが好きということもあり、韓国語を勉強していました。韓国語を韓国語のまま理解できるようになりたかったということと、大学生のうちにより多くの経験を積んでおきたかったため、この研修に参加することを決めました。

約2週間の研修期間中は、平日の午前中に韓国語での授業を受け、土日と午後は基本的に自由時間というような日程でした。韓国での授業は、普段大学で受けている、日本語での説明や解説がある韓国語の授業とは違い、韓国語を韓国語で学ぶ授業だったので、しっかりと理解できるのか不安でした。韓国に到着してすぐに行ったテストの結果によって、自分のレベルにあったクラスに振り分け

られましたが、最初の頃は、大まかにしか理解できていないところも多くありました。しかし、クラス内でのグループワークや休み時間の担任の先生との会話など、失敗しても大丈夫な状況で韓国語を使うことが今までより圧倒的に増えたことで、聞き取りや話すスキルが身につき、より正確に早く、理解することができるようになっていきました。所々、分からないところがあっても、前後の言葉の意味などから推測しながら理解することができるようになっていきました。また、最初はほとんどの韓国語を無意識に頭の中で日本語訳を挟んでから理解することが多かったのですが、この生活に慣れていくにつれて、日本語訳を介することが少なくなっていきました。まだ完璧ではありませんが、「韓国語を韓国語のまま理解する」という私の目標に少



しずつ近づくことができ、このことを実感することができた時が一番嬉しかったです。

自由時間は、ほとんど大学の外に出て、友達と色々な場所に行きました。服やアクセサリのお店に行ったり、雑貨屋さんやカフェに行ったりと、毎日充実した日々を過ごしていました。ずっと行きたかった、ロッテワールドとHYBEに行くこともでき、ずっと食べたかった韓国料理も食べることができ、幸せでいっぱいでした。どこかに行くことで必然的に韓国語に触れる機会が多くなったため、地下鉄や看板、商品の名前などで読む力、店員さんとの会話などで聞き取りと話す力を磨くことができたと思います。自由時間が多くあったことで、先生に頼ることなく、自分でなくてはならないというような必然的に韓国語を使う場面が多く、自主的に動いて自主的に韓国語を使うことができました。このような自由時間のおかげでより韓国語を上達させられたのだと感じました。また、今までドラマなどで見てきただけだった、日本とは違う、交通ルールや食事の最初に出される小皿に乗っているキムチや惣

菜など、韓国のルールや習慣に生で触れることができました。市場や商店街のような場所を歩くことで、より本場の韓国を感じることができました。韓国語を身につけるだけでなく、現地の空気を肌で感じることができ、とても良い経験になりました。

韓国で2週間という短い期間ではありましたが、すごく充実し、色々なことを吸収できました。先生に教えていただいたり、友達と話し合ったりと、勉強したことがすぐに実践することができ、本場のものに触れていられる環境が、私が韓国語を上達させることのできた大きな理由だと思います。この研修に参加していなければ、自分の韓国語の上達を実感することはなかったかもしれないし、韓国で仲良くなった友達との出会いもなかったと思います。この経験をさせてくださった先生方や両親に感謝でいっぱいです。研修中に感じた、韓国語の能力が足りなくて悔しい思いをしたという経験を活力に変えて、これからも韓国語の勉強に励みたいと思います。

中国語海外研修レポート

経済学部 経済学科 NGUYEN HUONG THOM

私は、2024年8月11日から8月31日までの3週間、中国での海外研修に参加しました。この研修では、上海外国語大学と北京外国語大学を拠点とし、中国語の学習や中国文化の体験、さらには現地での生活を通じて多くのことを学びました。特に、自分の世界観が広がったことを実感できた貴重な経験でした。

研修の前半は上海外国語大学での授業を中心に過ごしました。ここでは、多国籍の友人たちと共に学び、異なる文化背景を持つ仲間たちとの交流が、自分自身の考え方や価値観に大きな影響を与えました。授業では、中国語の文法や会話スキルの向上に取り組むだけでなく、現地の先生方から中国の文化や習慣についても詳しく学ぶことができました。先生方は非常に熱心で、異文化理解を深めるための様々な視点を提供してくれました。

また、授業外でも、上海市内の様々な観光地を訪れる機会がありました。中でも、夜の上海の景色は特に印象に残っています。ネオンが輝く高層ビルが立ち並ぶ景色は、都会の活気と同時に、未来的な都市の姿を感じさせました。上海の街並みは全体的に巨大で、そのスケール感に圧倒されることが多々ありました。



▲上海外灘

▲南京路(長さは5.5km)

さらに、私は長い間楽しみにしていたパンダを見に、動物園へも足を運びました。動物園は非常に広大で、1時間以上歩いても全てを見て回ることはできませんでしたが、動物たちの生活ぶりに触れられる時間はとても充実していました。パンダは特に愛らしく、自然な姿に癒されるひとときとなりました。



▲上海の動物園

▲ドラマの背景

研修の中で特に印象深かったのは、異文化に対する理解が深まり、2週間という短い期間ながらも、上海の街や人々に愛着を感じるようになったことです。この街で出会った人々が、まるで第二の家族のように感じられる瞬間が多く、離れる際には少し寂しさを覚えるほどでした。

研修の後半は、北京で1週間を過ごしました。ここでは、授業は行われませんでしたが、現地での観光や食事を楽しむ時間が多く取れました。特に、北京の名所を巡りながら地元の食文化に触れることで、中国全土の多様性をより一層理解できたと感じています。

北京外国語大学は広大なキャンパスを誇り、大学内には学生向けのスーパーや郵便局があることに驚きました。これまで日本で経験してきたキャンパスライフとは異なる、スケールの大きさと利便性の高さに感銘を受けました。

観光では、万里の長城を訪れることができたことが大きなハイライトでした。壮大な景観を目の当たりにし、長い



▲万里の長城1時間登った

歴史の中で築かれてきた中国の文化とそのスケールに感動しました。また、最終日には、中国のトップ大学である清華大学と北京大学のキャンパスを自転車で一周することができました。キャンパス内には入れなかったものの、外からその壮大な建物を見るだけでも非常に満足感を得ることができました。



▲北京ダック

▲ザリガニ



▲自分は北京料理の方が好き

今回の研修を通じて、中国の言語や文化に対する理解が深まったことはもちろんですが、それ以上に、自分自身の視野が広がり、国際的な感覚を身につけることができたと感じています。多国籍の友人たちとの出会い、異文化に触れる機会、さらには上海と北京という異なる都市での生活体験は、今後の私の学びやキャリアにおいて大きな財産となることでしょう。また、現地の天候や生活習慣に適応しながら、常に新しいことを学ぶ姿勢を持ち続けることができた点にも自信を持っています。上海では突然の雨に驚かされることが多く、外出の際には常に傘を持ち歩くことが大切だと学びました。このような小さな学びも、現地での生活を通じて得られた貴重な経験です。

最後に、研修で出会った人々や経験が、私にとってかけがえのない思い出となりました。短い期間ながらも、共に過ごした仲間たちとの絆や、現地での経験が、私のこれからの人生に大きな影響を与えることは間違いありません。

学びと経験の3週間

デザイン工学部 建築・環境デザイン学科 木下 陽貴

私は、3つの目的を持ち海外研修に参加しました。それは、「英語のリスニング・スピーキング能力を上げること」、「海外の文化に触れること」、「海外の建築物や街並みを知ること」です。この3つの内容について掘り下げていきたいと思います。

1つ目は「英語のリスニング・スピーキング能力を上げること」についてです。これから先、今まで以上にグローバル化が進み海外の人と関わることが多くなると予測され、この時代に活躍するには英語能力が必要になると思います。大学入学以降、専攻科目の課題に割く時間が多く、英語の勉強時間が極端に減りました。そこで、海外研修を機に英語の勉強をしようと考えました。海外研修に参加するうえで英語の基礎が大切だと感じ、隙間時間を見つけ基本となる単語や文法の勉強を行いました。そして出発日を迎えました。初日は、初めての英語ばかりの生活でとても神経を使い疲れました。自己紹介などを現地できた友達として、英語力が低いながら何とか乗り切りました。しかし2日目以降、徐々に話せる内容も減り、文法や単語の発音が間違っていたらどうしようと考えようになり、ただ他の人が話しているのを聞いているばかりの日々になりつつありました。そんな中、日本の他の大学から来ている友達が「間違っているけど誰も気にしないし、もっと自信をもってコミュニケーションとりなよ。僕だって間違っただけだよ。」と声をかけてくれました。そんな仲間の言葉でこのままでは何も残らず日本に帰ることになると思いを改めました。急に英語を話せるようにはなりません、友達とすれ違ったときに挨拶や声をかけるところから始め、話すスピードがゆっくりでも段々と会話に入っていくようになりました。リスニングの面では、特に授業で困ることが多かったです。最初は先生が授業で何を言っているのか全く分からず、ジェスチャーや友達の通訳を頼りにしていました。しかし、1週間ほど授業を受けると先生が何を言っているのか少しずつですが分かるようになりました。一番リスニング力が上がったと感じたのは、帰りの飛行機です。行きの機内アナウンスは何も聞き取れませんが

したが、帰りの機内アナウンスでは少し聞き取れるようになっていて3週間の成果を感じることができうれしかったです。

2つ目は「海外の文化に触れること」についてです。3週間の海外の生活を通して、他国の文化を肌で感じたいと思いました。また、生活の中で日本の良いところや課題を知るきっかけにしたいと思いました。オーストラリアで生活を始めて最も驚いたことは、お風呂です。寮だった影響もあるかもしれませんが、お風呂(シャワー室)とトイレが同じ場所にありました。お風呂はそれぞれが個室で、浴槽がなく、日本の市民プールにあるようなシャワーがあるのみでした。着替えを置く場所や靴を置く場所もないため、服はシャワー室の扉にかけてシャワーを浴びました。日本には、脱衣所や浴槽があるおかげで快適にお風呂に入れているのだと改めて実感しました。一方で、生活をしていて現地の良さも感じることができました。それは、生活が朝型だということです。朝5時や6時に起き、犬の散歩や朝日を見に行き、夜は9時や10時には寝る生活をしているそうです。午前中のみ営業しているカフェも多くあり、街全体として朝型の生活をしているのだと感じました。私も何度か早起きをし、近くの海岸まで朝日を見に行きました。日本では基本的に夜型の生活をしていますが、朝型の生活をしてみると、普段より充実した一日を過ごすことができ、日本でも朝型の生活をしたいと感じました。

3つ目は「海外の建築物や街並みを知ること」についてです。私は、大学で建築を専攻しており、オーストラリア特有の街並みや建築物を実際に見たいと感じたからです。海外研修先の学校は郊外にあるため、一軒一軒の土地が広く平屋建てが多く見られました。信号が少なく、多くの交差点でラウンドアバウト(環状交差点のことであり、ロータリーに似た見た目)が使用されており、新たな発見をすることができました。一方、ケアンズ中心地の街並みは、碁盤目状に整備されており、道路の幅が広く、路肩には駐車場が備えられていました。街自体もキャパオーバーしておらず、渋滞や人で溢れかえっていることがなく快適

に観光ができました。中心地の建物は2階建てから3階建てが多く、低い街並みに抑えられていました。日本とは、全く異なった形式の街を見ることができてよかったです。

今回の3週間という短期海外研修を通して、英語のスキルだけでなく、現地の生活や街並みなどを知ることがで

き、参加した甲斐があったと感じました。ここには書ききれないほどの学びや経験を通して充実した時間を過ごすことができました。今回の学びや経験をこれからの生活や勉強に活かしたいです。



▲海外研修先の近くの海岸



▲現地での授業



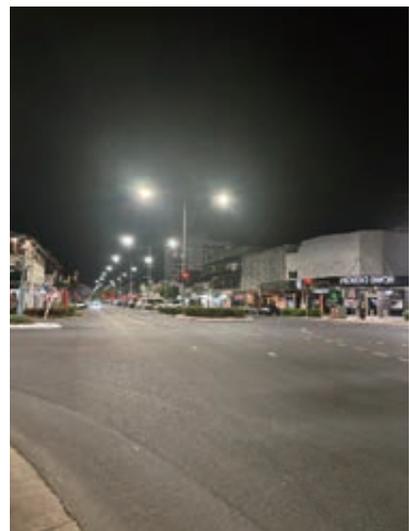
▲大きなハンバーガー



▲朝日



▲海岸近くの丘に登った帰り道



▲夜のケアンズ中心地

シアトル留学レポート

経営学部 経営学科 柴田 嵩大

初めに私が留学に行こうと思った理由を2つ紹介します。1つ目は、私の父親が学生の時に同じように留学に行っていてそこでの体験をよく私に話してくれたため、私自身留学に興味を持っていました。2つ目は、時々家族で海外旅行に行くのですが、大体1週間程度で帰国するため、英語が少し聞き取れるようになって帰ることが多く自分自身もう少し長くいれば限りなく聞き取れるのではないかと考えていたため今回のこの機会トライしてみようと思ったのがきっかけです。

ここから本題の留学に行ってみての経験をお話したいと思います。まず、アメリカで3週間生活してみて私を感じたことを紹介します。やはり最初は、日本がどれだけ治安がよく住みやすいかを実感させられました。ダウンタウンに行くときとあちらこちらにホームレスの人がいたり、大麻を吸ってさげんでいる人がいたり、初日にダウンタウンに行ったときは、日本とは違い過ぎて本当に驚きました。また、コンビニや自動販売機など日本と違いほとんどありませんでした。なので最初は凄く不便でした。逆にいいなと思ったことは、公園が広くてバスケットコートや、遊具、芝生がきれいで広く、人も多く私も何回も利用していました。もう1つあって、それは、アメリカ人のフレンドリーなところです。お店にいる人や、学校の先生、公園にいる人など色々な人が、笑顔で挨拶してくれたり、一緒にバレーボールをやろうと声をかけてくれることが、私自身凄く嬉しかったです。そこが大きい日本と違うなと思いました。もう1つ私は、3週間ホームステイで過ごしたのですが、ホストマザーとの会話がこの留学で一番自信がついたと思って



います。基本語学学校とは違い、マンツーマンでネイティブ英語を話すことがないので聞き取れたことが一番嬉しかったです。

次に語学学校に行って感じたことは、大きく2つあります。まず1つ目は、午後からアクティビティというのがありまして、そこで語学学校の友達とミニゲームをしたり、観光名所に行くことで色々な人とコミュニケーションをとるので、友達がたくさん出来ました。そのおかげで、最初は全く話せなかったのが、最後には少しなら話せるところまでいけるようになりました。さらに、そこで仲良くなった友達は、色々な国から集まってくるので、みんなで各国の手料理を振る舞ったりして、食文化の違いを学べたというのは、私の中では、凄くいい思い出になりました。2つ目は、日本の学校で受ける授業との違いです。まず語学学校は、グループ授業が基本です。チーム内で話し合いをしながら、クラスみんなが一体となって答えるやり方です。そ



のやり方だとみんなが参加するので発言力も上がるし、コミュニケーションの向上にもなるのでぜひ日本の学校も取り入れて欲しいと思いました。

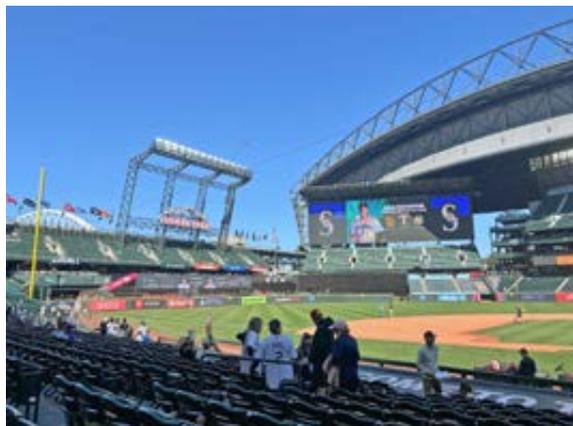
次は、この留学で得たものを紹介します。1つ目、色々な国の人と友達になれたことで色々な国に興味を持つことができたこと。2つ目、英語に自信がなかったけど、自信がつきもっと英語を学びたいと思えたこと。3つ目、他国の文化を学び自分の考え方が変わったこと。4つ目、日本の当たり前は、凄く贅沢だということを学びました。

さて初めに疑問に思っていた、長く滞在すれば英語は聞き取れるようになるのか、結果としては8割近く聞き



取れるようになりました。それも、ホストマザー、友達、先生のおかげだと思っています。この経験は今後社会に出たときに、人との関わり方、文化の違いなど様々なことを活かしていけると思いますのでそこを強みとして頑張っていきたいと思います。

最後にこの企画をしていただいた旅行会社さん、国際交流課の皆さん、そして家族、私をこの留学に行かせていただき本当に感謝しています。ありがとうございました。



ニューカッスル ノーザンブリア大学 在外研究記(2023年9月~2024年10月)

経営学部 商学科 澤登 千恵

渡航直前の2023年8月下旬、ノーザンブリア大学のベルナルド先生から「10月にセミナーを開催するので、自身の研究について報告してください。それから、報告に関するアブストラクトを至急送付してください。」とメールがきました。渡航準備で人生一(いち)忙しかった時期でした。ヒィヒィ言いながらアブストラクトを執筆し送付したのを昨日のこのように思い出します。お陰様で、そんな感じで始まった私の在外研究は研究三昧の日々となりました。

セミナーは約1か月後の10月20日、オンラインで開催されました。何とか報告することはできたものの、フロアからの質問がまったく聞き取れず、もちろん返答もできず、これは大変苦い経験となりました。一方で、自身の研究を多くの方に聞いてもらう機会になりました。後日、メールで頂戴したコメントはどれも鋭いものばかりで、これらを参考にしたお陰で、より正確な分析が出来たと思います。また、研究だけでなく、英語も勉強しなければならないことを再認識する機会ともなりました。本来なら渡航前にすべきことだったのですが(十分に習得できないまま在外研究に入ってしまう)、遅まきながら、夜な夜な、オンライン英会話で、大学では国際交流イベントや英語の授業に参加させてもらって、英会話を猛レッスンすることになりました。こちらにいる間、オンラインで英語を話している時間が、リアルで話している時間よりも、ダントツ長かったことは言うまでもありません(泣)。その甲斐あってか、6月13日、リバプールで開催されたAHRカンファレンスでの報告

では、質疑応答も何とかこなすことが出来、前回のセミナーでの苦い経験を少しは挽回できたかなと思っています。

大学で出会った先生方は皆さん教育に対してアグレッシブでした。私が所属していたビジネス アンド

ロー 研究科には非常にたくさんの院生が在籍しており、先生一人あたりの担当院生数は多かったのですが、それでも、先生方は一人ひとり研究室に招いて、時間をとって、丁寧に指導されていました。特に、先生が、彼らを一人の研究者(起業家)として、対応されていたことが印象的でした。同僚のクリス先生からはイースター(キリストの復活祭)の昼食会にもご



▲写真2 在外研究初のセミナーのフライヤー



▲写真3 国際交流で訪問したバンバラ城



▲写真1 ノーザンブリア大学のキャンパス



▲写真4 イースターの昼食会

招待いただきました。クリスマスは毎年、お祝いしていましたが、イースターをお祝いしたのはこれが初めてでした。たまごのペインティング(イースターエッグ)にも初挑戦しました。

最後に、滞在していたニューカッスルについて少しお話しします。イングランド北東部を代表する都市で、19世紀、造船と重工業で栄え、産業革命の中心地でした。世界で初めて旅客を運んだ機関車を製造し、鉄道の父として知られるスティーブソンや近代大砲の発明者であるアームストロングの出身地です。今も街はレンガ造りの建物で統一されており、その中に黒い色をしたレンガ造りの建物があります。これらは産業革命時代から残っている建物で、工場からの煙が染みついて黒くなったそうで、当時の繁栄ぶり(蔓延ぶり?)を今に伝えています。アートと音楽の街として再開発中で、ノーザンプリア大学は「見つけていたい(Every Breath You Take)」でグラミー賞を受賞したボリスのヴォーカリスト スティングの出身校でもあります。中心地にあるセント ジェームズ パークはプレミアリーグのメンバーであるニューカッスル ユナイテッドFCの本拠地としても知られています。人々は、すれ違うときいつも、“Hello” “Thank you” “Sorry”と声を掛け合います。びっくりするほど人情味溢れる温かい街です。日本からの直行便はなく、ロンドン、パリ、アムステルダム、ドバイなどを経由する必要がありますが、産業革命時代のイギリスに触れてみたいと思われたらぜひ、訪れてみてください。素敵な発見と出会いがあると思います。



▲写真5 ニューカッスルのキーサイド



▲写真6 1年間暮らしたジェズモンド地区



▲写真7 先日、来日されたベルナルド先生とご一緒に



▲令和6年度 写真・イラストコンテスト(写真部門)応募作品
『STAND BY ME』
九里 孝行(大学院 工学研究科 機械工学専攻 博士前期課程)

学術研究書出版助成本の概要



学術研究書出版助成本の概要

Financial Aid for Publishing

令和6年度 写真・イラストコンテスト(写真部門)奨励賞作品
『金色に輝く夏の思い出』
水瀧 岳大(工学部 電気電子情報工学科)

『漢語意合語法説略』の概要

国際学部 国際学科 教授 張 黎

意合文法の学術思想は、1987年に初めて漢字に関する学術媒体で取り上げられて以来、すでに約40年の歴史があります。その間、1994年に吉林教育出版社より『文化の深層的選択－中国語意合文法論』が、2001年に日本の中国書店より『中国語意合文法綱要』が、2012年に日本の白帝社より『中国語意合文法研究－認知類型学と言語論理に基づく構築』が、そして2017年に北京語言大学出版社より『中国語意合文法学入門－中国語型文法パラダイムの理論構築』が出版されました。本書はこれらの著書に続く、意合文法研究の最新の成果です。

『漢語意合語法説略』は全7章で構成されています。

- 第1章：理論と方法
- 第2章：意合の文法メカニズム
- 第3章：字の意合研究
- 第4章：語の意合研究
- 第5章：文の意合研究
- 第6章：意合文法の歴史的源流
- 第7章：付録

本書は主に以下の3つの部分から成る論文を集めたものです。

- (1) 2017年以降に発表された意合文法研究に関する論文
- (2) 未発表の研究成果のいくつかを新たに追加
- (3) 付録として2017年以前に発表されたが、2017年の論著に収録されなかった価値ある旧作を収録

本書のメインテーマは漢語意合文法です。漢語意合語法とは本人が提唱した中国語の文法に関するオリジナルの理論であり、1987年の第1編の論文発表以来、数十年にわたりこのテーマを研究し続けて来ました。現在、意合文法は中国の語学界に幅広く注目され、主要な研究テーマになっております。同時に、日本の『中国語学辞典』にお

いても一つの研究項目として収録されております。

『漢語意合語法説略』は本人の主要な研究成果を集めた著書であり、中には『中国語学』、『当代語言学』、『中国語文法研究』など国内外の中国語を研究する代表的な学術雑誌に発刊された論文12本を含み、また『大阪産業大学論集』（人文社会科学篇）2本を含みます。本書はおおよそ25万文字、すでに掲載された論文は全書の7割を占めております。

中国語の意合の問題は、小生の学術的な探究の中心的な課題です。これは、中国語の意合が中国語文化のDNAであり、最も根源的な言語文化の遺伝子だと私は考えているからです。中国語意合文法の探究は、中国語文法研究の根本的な方向性であるべきであり、これは今後も発展しうる大きな可能性を秘めた学術的問題です。中国語学界にとっての歴史的な宿命であり、永遠のテーマでもあります。

意合文法は、言語の意味範疇と認知の特徴を主要な研究対象とする理論です。この研究は中国語文法の研究そのものに対してだけでなく、一般的な文法理論に対しても貢献をしています。同時に、日中言語の対照研究や自然言語の人工知能化に対する研究にも重要な価値を持っております。

もちろん、本書の中で、すべての問題を限なく、また詳細に論じることはできませんが、本書が中国語意合文法研究の新たな一里塚となり、また中国語文法の本質を明らかにし、中国語型の文法パラダイムを確立する一助となることを願っています。さらに、中国語文法研究が世界の言語学研究の一環として位置づけられ、普遍文法の研究においても中国語学としての独自の貢献を果たすことを期待しています。

本書の各研究テーマには若手研究者も参加しており、一部の研究は共同の議論を通じて完成しました。彼らは、名桜大学の李夢迪准教授、安徽工程大学の張岩博士、太原師範学院の張聞博士、立命館大学の王芸媛博士、暨南大学の博士課程の張熙寧さんです。各研究者の貢献

は書中に明記されておりますが、ここにまず一括して感謝の意を表します。若手研究者の参加は研究事業の未来の希望であり、彼らが中国語意合文法の理念を引き継ぎ、中国語文法研究に新たな貢献をしてくれることを心から

期待しています。

本書の出版にあたり、大阪産業大学学会の支援をいただきましたことに感謝申し上げます。



▲令和6年度 写真・イラストコンテスト(イラストデザイン部門)奨励賞作品
『デジタルフローと都市の脈動』
切建 尚也(デザイン工学部 建築・環境デザイン学科)

学会報告



学会報告

Report of the Academic Society

令和6年度 写真・イラストコンテスト(写真部門)応募作品
『輝く未来への道』
森下 珠羽(工学部 都市創造工学科)

令和6年度 年次報告

令和6年度 常任委員長 塩見 剛一

大阪産業大学学会は、会則の中で「本学における学術・研究・教育の発展および普及に寄与し、あわせて研究助成等を図ることを目的とする」と謳っております。この目的に叶うべく、例年『大阪産業大学論集』や『大阪産業大学学会報』を発行し、学術講演会の開催、研究会・シンポジウム等の補助や、学生会員の研究教育活動の助成、海外留学の補助等の事業、さらには主に学生会員を対象とする各種コンテストや様々な学外見学会を行ってまいりました。

近年の大学を振り返りますと、新型コロナウイルス感染症の蔓延により、令和2～4年度は、授業の実施方法や学生の課外活動など、様々な面で従来とは異なった対応を迫られました。本学会においても感染症の状況に配慮しながら可能な方策を探り、活動を行ってまいりました。そのような状況下において、対面での活動は制約が多く見られたものの、『大阪産業大学論集』および『大阪産業大学学会報』は継続してほぼ例年どおりの発行を続けることができました。令和5年度からは感染症の状況が落ち着いたことで、海外留学費補助も含めて学会企画の事業はほぼ通常どおりの実施が可能となり、令和6年度も当初の予定どおりの活動を行うことができました。そして今般、学会報60号という節目の号数を迎えることができましたこと、また本号で『アフターコロナの大学の在り方』というテーマの下、現在およびこれからの大学の在り方を会員の皆さまと、いま一度ともに考える機会をもてますことを嬉しく感じております。

令和6年度の活動内容を一覧しますと、9月に「第3回 関西国際空港見学会 海上保安庁・大阪税関の見学」、「第2回 愛知交通産業見学会」や「姫路城&明石市立天文科学館見学会」を実施し、11月には「第9回 芸術鑑賞巡り(豊田市)」、「神戸海洋博物館&人と防災未来セ

ンター見学会」を実施いたしました。また、学術講演会では臨床心理士の羽下大信先生にお越しいただき、ワークショップ形式を取り入れた講演には、多くの教職員ならびに学生会員の参加がありました。

企画事業としては、ウェブでの応募が可能な学会コンテストを開催しております。このうち「第25回 ふんかくコンテスト」には長編部門2件、短編部門1件の応募があり、「第9回 写真・イラストコンテスト」には写真部門26件、イラスト部門6件の応募があり、「第7回 見学会プランニングコンテスト」には1件応募がありました。

助成事業としては、商業出版の単著1件の申請があるほか、博士論文2件が申請されております。また、学生の海外留学費補助として、海外語学研修(20件)と海外留学(長期1件、短期3件)への補助を行いました。

今年度の学会活動は、『大阪産業大学論集』、『大阪産業大学学会報』の発行、出版助成、見学会、講演会、海外留学費補助などについて、概ね当初の計画どおりに実施できました。次年度も本学会の目的に沿った活動を計画し実施できますことを願っております。

最後になりましたが、今年度の学会活動を支えてくださいました常任委員の先生方、とくにチーフ会メンバーである編集委員長の朴容寛先生(経営学部)、企画委員長の笹岡敬先生(デザイン工学部)、法務委員長の李東俊先生(経済学部)、財務委員長の藤永壮先生(国際学部)、広報委員長の伊藤一也先生(工学部)、さらに産業研究所事務室幹事の伊藤治尚事務長、ならびに学会事務局の小出和希さん、湯浅由利さんのご尽力に心より感謝申し上げます。

(全学教育機構 准教授)

令和6年度 学会活動報告

【評議員会】

第1回評議員会 (オンライン開催)	6月18日	議題①令和6年度学会行事予定表について ②令和5年度会計報告 ③令和5年度会計監査委員報告 ④令和6年度予算(案)について ⑤規程改正(案)について ⑥令和6年度各委員会の課題 ⑦学会予算縮小への取組み(案)について ⑧その他
第2回評議員会 (オンライン開催)	3月18日	議題①令和6年度活動報告 ②令和7年度チーフ会人事について ③令和7年度活動方針について ④会則・規程集改正(案)について ⑤令和7年度学会予算(案)について ⑥令和7年度行事予定表について ⑦その他

【常任委員会】

常任委員会	3月4日	議題①規程改正について ②周年記念事業予算申し送りについて ③令和7年度各委員会の役割分担と仕事内容(内規)について ④評議委員会について
-------	------	--

【出版助成審査委員会】

出版助成審査委員会 (オンライン開催)	9月16日	令和7年度大阪産業大学学会 学術研究書出版助成申請に関する審査
------------------------	-------	------------------------------------

【会計監査】

5月20日	令和5年度外部会計監査
6月 7日	令和5年度内部会計監査
11月15日	令和6年度外部中間会計監査

【チーフ会】

第1回チーフ会	4月23日 オンライン開催	第7回チーフ会	11月19日 オンライン開催
第2回チーフ会	5月21日 オンライン開催	第8回チーフ会	12月17日 オンライン開催
第3回チーフ会	6月 4日 オンライン開催	第9回チーフ会	1月21日 オンライン開催
第4回チーフ会	7月16日 オンライン開催	第10回チーフ会	2月18日 オンライン開催
第5回チーフ会	9月17日 オンライン開催	第11回チーフ会	3月 4日 オンライン開催
第6回チーフ会	10月15日 オンライン開催		

【編集委員会】

第1回編集委員会	4月23日 オンライン開催	第6回編集委員会	10月15日 オンライン開催
第2回編集委員会	5月21日 オンライン開催	第7回編集委員会	11月19日 オンライン開催
第3回編集委員会	休会	第8回編集委員会	1月21日 オンライン開催
第4回編集委員会	7月16日 オンライン開催	第9回編集委員会	2月18日 オンライン開催
第5回編集委員会	9月17日 オンライン開催		

【令和6年度発行論集・学会報】

種 別	分 野	巻 号 数	備 考
論 集	経営論集	26巻1号(退職記念号)	年2回 原稿募集
	経済論集	26巻1号、26巻2号	年2回 原稿募集
	人文・社会科学編	52、53	年2回 原稿募集
	自然科学編	135	年1回 原稿募集
	人間環境論集	24	年1回 原稿募集
学 会 報		60	年1回 発行

【企画委員会】

第1回企画委員会	4月23日 ハイブリッド開催	第6回企画委員会	10月15日 ハイブリッド開催
第2回企画委員会	5月21日 ハイブリッド開催	第7回企画委員会	11月19日 ハイブリッド開催
第3回企画委員会	休会	第8回企画委員会	1月21日 ハイブリッド開催
第4回企画委員会	7月16日 ハイブリッド開催	第9回企画委員会	2月18日 ハイブリッド開催
第5回企画委員会	9月17日 ハイブリッド開催		

【企画事業】

◆学会コンテスト

第25回 ぶんかくコンテスト

第9回 写真・イラストコンテスト

第7回 見学会プランニングコンテスト

◆第3回 関西国際空港見学会 9月4日

海上保安庁・大阪税関の見学

◆第2回 愛知交通産業見学会 9月11日

トヨタ博物館とフライトオブドリームスの見学

◆第6回 見学会プランニングコンテスト優秀賞プラン 姫路城見学会 9月18日

姫路城と明石市立天文科学館見学

◆講演会 羽下大信氏講演会「私の聴き方、あなたの聴き方ー音楽素材を使ってー」 10月29日

◆第9回 芸術鑑賞巡り(愛知) 11月1日

豊田市美術館と豊田市博物館の見学

◆神戸市海洋博物館と人と防災未来センター見学会 11月6日

施設見学とクルージング

<後援>

◆活動への助成

12月14日 大学院経済学研究科 日中大学院生学術フォーラム 学会発表(海外)の助成

2月 7日～ 2月10日 デザイン工学部 建築・環境デザイン学科 優秀卒業研究展 修士研究展2025への助成

◆令和6年度 海外語学研修および海外留学をした学生への助成

◆卒業論文集等の発行援助

◆学生表彰

【広報】

適時 webサイト更新

【法務】

規程改正の検討

【財務】

毎月の学会会計処理(事務局)後に伝票の確認および預金通帳残高との照合(本会計)

【大阪産業大学学会会員数一覧】

(人)

	令和3年度	令和4年度	令和5年度	令和6年度
学生会員(院生)	103	113	119	123
// (大学生)	7,630	7,423	7,135	6,761
正会員(専任教員)	208	212	208	206
特別会員	1	2	2	3
準会員(非常勤・卒業生)	26	22	22	18
名誉会員	13	13	11	9
賛助会員	3	4	6	7
計	7,984	7,789	7,503	7,127

12月末現在の会員数

令和5年度 学会会計報告 (令和5年4月1日～令和6年3月31日)

令和5年度 財務委員長 塩見 剛一

令和5年度における大阪産業大学学会の収支決算を、下掲の表のとおりご報告いたします。

収入の部では、前年度に比べて収入小計が約70万円の減少となりました。減少の理由は、学生総数の微減により、学会費(学生)が約53万円の減少となったことが主な要因です。現在は学生数の変動に合わせ、収入に見合った規模になるよう中長期的な予算縮小に取り組んでおり、令和5年度には学会報のデジタル化や、正会員(教員)に対する海外留学費補助金の補助を削除するなどの規定改正がなされました。

支出の部では、前年度(令和4年度)に比べて支出小計が約237万円の減少となりました。論集発行回数が経営論集と経済論集におきまして年3回中2回発行となったことで約64万円の減少、また出版助成の申請数が前年度

と比べて少なかったために、約243万円の減少が生じたことが主な理由となります。

その一方で、学会イベントの見学会や学会主催の講演会を昨年度とおよそ同程度の規模で開催することができましたため、講演会費が前年度に比べて約1万円の増加、イベント費は約30万円の減少、諸活動費は約2万円の増加となりました。また昨年度に比べて海外留学の状況が大幅に改善されましたため、海外留学補助金は約118万円の増加となりました。

令和5年度におきましても、各種見学会や学会コンテンツなどのイベント、出版助成、海外留学補助など、多岐にわたる助成を積極的に行いました。今後も、会員の皆様に少しでも有益な会費還元ができますよう、一層努めてまいります。

【収入の部】

(単位：円)

科	目	本年度予算額	本年度決算額	増減
学会費(学生)		17,000,000	16,836,000	△ 164,000
〃 (正・準)		1,136,000	1,161,000	25,000
受取利息		200	557	357
雑収入		76,760	63,760	△ 13,000
(小	計)	18,212,960	18,061,317	△ 151,643
前年度繰越金		37,826,458	37,826,458	0
合	計	56,039,418	55,887,775	△ 151,643

【支出の部】

(単位：円)

科	目	本年度予算額	本年度決算額	増減
論集発行費		4,000,000	2,579,581	△ 1,420,419
学会報発行費		1,350,000	1,360,800	10,800
講演会費		800,000	791,523	△ 8,477
イベント費		2,000,000	1,874,049	△ 125,951
諸活動費		600,000	573,200	△ 26,800
海外留学費補助金		5,000,000	1,592,804	△ 3,407,196
出版助成費		5,000,000	3,000,651	△ 1,999,349
ウェブサイト保守点検費		380,000	461,125	81,125
人件費		5,600,000	5,506,928	△ 93,072
渉外慶弔費		200,000	0	△ 200,000
印刷製本費		200,000	205,121	5,121
通信輸送費		100,000	69,318	△ 30,682
学生表彰費		1,800,000	1,556,056	△ 243,944
法定福利費		950,000	843,003	△ 106,997
福利厚生費		15,000	10,564	△ 4,436
支払手数料		300,000	243,386	△ 56,614
その他		50,000	29,061	△ 20,939
(小	計)	28,345,000	20,697,170	△ 7,647,830
周年記念事業繰入金		1,500,000	1,500,000	0
次年度繰越金		26,194,418	33,690,605	7,496,187
合	計	56,039,418	55,887,775	△ 151,643

編集後記

学会報60号のテーマは『アフターコロナの大学の在り方』です。2019年末より始まった「新型コロナウイルス感染症の世界的流行(COVID-19 pandemic)」は、2022年まで、その感染は230の国と地域で起こり、大阪産業大学では、同感染防止のために2020年度から2023年度まではハイブリッド授業を行いました。ところが、ハイブリッド授業は授業の効率性、部活動やサークル活動の縮小、そして、友達づくりの困難などの諸問題が起こり、2024年度からは原則として対面授業を行うようになりました。

コロナ禍によってIT化がより進み、「出入国審査の自動化、シャトル電車の自動運転などIoT、ビッグデータ、AI、RPA等の新しい技術による第四次産業革命の時代」(朴、2018:41)になり、出席打刻ばかりではなく、WebClassにシラバスをはじめ、授業内容や小テストの実施、レポートを提出するようになりました。また、学生が講義などを受ける際、授業内容をノートにメモするのではなく、iPhoneで録画したり、写真を撮ったりしています。レポートの作成や提出も手書きではなく、iPhone、あるいはコンピューターのWordファイルで作成して、提出する学生も多くなりました。そして、SNSをはじめ、無料で使える「ChatGPT」の翻訳機能により、世界のどの言語でも情報入手できる時代になりました。

学会報60号では、こうしたデジタル化が進む中、アフターコロナ時代に望ましい大学の在り方、授業の在り方、そして、人のつながりをいかに作っていったらよいかを特集記事とし、教員・学生の方々にご執筆いただきました。

アフターコロナ時代になっても感染が気になり、マスクをかけたりしている教職員と学生も未だ少なくないし、新型コロナウイルスのパンデミック時代に行ったハイブリッド会議などになれているかもしれませんが、原則的に対面授業している現在も、オンライン会議などをしていることが多いです。

にもかかわらず、大阪産業大学ではコロナ禍前と同じく、「ウィズ(with)コロナ」を生き抜き、「アフター(after)コロナ」を制するために、対面授業を行うばかりではなく、実習やオープンキャンパスなどの行事、部活動やサークル活動、海外語学研修や留学、学会主催見学会、コンテスト、講演会、学術研究書出版助成も行われております。

そして、デジタル時代の到来により、学会報冊子体の発行を今回から休止し、Webサイトでの配信のみになりましたので、宜しくお願い申し上げます。

最後になりますが、学会関連イベントを報告してくれた学生、留学記をご執筆いただきました先生方、本号の編集・発刊にご協力いただいた編集委員の方々、また特に精力的に編集の任にあたってくださいました学会事務局に深く感謝申し上げます。

朴容寛(2018)「リーダーシップのあり方に関する研究—「偉大なる平凡人たれ」を中心に」
『大阪産業大学経営論集』第20巻第1号：21-52。

(令和6年度編集委員長：朴 容寛)

All rights reserved. No part of this publication may be reproduced or transmitted, in any form or by any means, without prior permission in writing from the publisher.

大阪産業大学学会報 第60号 非売品

発行日 2025(令和7)年3月1日
発行 大阪産業大学学会
〒574-0013
大阪府大東市中垣内3丁目1-1
TEL (072) 875-3001 (大代)
FAX (072) 875-6551
印刷 友野印刷株式会社
〒700-0035
岡山市北区高柳西町1-23
TEL (086) 255-1101
FAX (086) 253-2965

Academic Society
of Osaka Sangyo University